

んだ。夫れ被害者は英國の漁船である。英國の人民である。

ゼームス一世以來、「ユニオンジャツキ」の旗に對して敬禮せざるものは軍艦であらうが、商船であらうが、斷じて英吉利海峡の通過を許さずとまで叫びたる英國が、其の國旗を掲ぐる漁船をば、罪咎もなくして外國軍艦の爲に撃沈されたのである。大英國たるもの必ずや強硬の處置を執るに相違あるまい。而も英國は我の同盟國である。開戦以來、官民擧つて、我に多大の同情を寄せて呉れた。左れば此の秋に於ける、苦しき我が戦局の詳細を知悉せる英國は、露國艦隊の暴行に對し、此の際何等かの手段に依りて、其の東航を遲滞せしめて呉れるであらうと思つた。他人の禪で相撲を取るよりも、尙ほ憐ない希望ではあるが、溺るゝものは藁をも攪むとかで、こんな意氣地のない考へまでも抱いたのである。併し當て事と何とかは向ふから外れる倣ひ、此の希望は全く痴人の夢に等しき空頼みであつた。乃ち英國は最初の意氣込に似もやらず、唯一通り御座なりの抗議を申込んだばかりで、露艦隊は平然として、其の航海を繼續し、十一月初旬、支隊は既に地中海に入り、本隊は亞弗利加迂回の途に就

いた。

是に於て我が海軍作戦の前途は益々險惡となり、海軍——陸軍——聯合艦隊——第一三軍の間に於ける沈痛慘憺たる交渉が再び開始せられた。海軍に於ては、或る時期に至るも旅順が尙ほ陥ちざる曉には、脊に腹は代へられぬ。遺憾ながら我が艦隊をして、斷然、旅順方面より引上げしむることに決心した。陸軍に於ては、愈々艦隊が引上げた場合には、滿洲籠城の覺悟で、大連には糧食其他の軍需品が山の如く蓄積せられた。軍國の危機は今や殆ど絶頂に達せんとして居る。此の時に於ける東郷聯合艦隊司令長官と、乃木第三軍司令官の苦心憂慮は、到底、筆紙、口舌の能く表はし得る處ではない。

翻つて第三軍當時の状況は如何と云へば、第二回總攻撃中止後、松樹山、二龍山、東鷄冠山北の三堡壘に對し、堡壘爆破の目的を以て坑道の掘穿に著手した。即ち敵壘の地下に「トネル」を穿ちて、之に數千斤の火薬を填充し、以て敵の砲臺を地底より、爆破せんとするので、彼の聞くも物凄き旅順の地下戦は、將に是から始まらんと

するのである。然るに當時第三軍に於ては、是まで數度の激戦に依り、最も精銳なる現役兵の多數を亡ひ、各師團ともに、俄仕込の補充兵と、半老の後備兵とを以て満たされ、軍の素質は著しく劣つて來た。

自分は、或時、大連の埠頭場に於て舊式の銃を又みて休憩せる一隊の兵士を見た。其の肩章に依り直に第九師團某隊の兵にして、將に旅順に向はんとするものなることが知られた。何れも青春の血は既に面に消えて、目尻には早や漣の小皺さえ湛へ、負へる背囊も最と重たげである。斯かる老兵士も、あはれ遠からずして旅順の壕の埋草になるのかと思ふと、坐に惻哀の情に堪へない。

『どうも御苦勞だね、一體、君等は何年兵かい？』  
と尋ねると、鼻下に八字髭を蓄へた一人の上等兵が快活なる句調で、

『私達やア二十三年兵でさア、當り前なら、最う國民軍に入つとるのですが、戦争で延期された爲め、到頭引つ張り出されました。我々が取つて置きの神様で、此の次は愈々國民兵の番ですよ……日本にやもう若い者は種切れですせ！。ハ、ハ、ハ、』

傍の色の生白い補充兵らしい二等卒君がさも心配さうな顔付きで、

『一體、旅順はどんな模様なのですか？ また容易に落ちさうにもありませんか？』  
と聞く。自分は彼の慘憺たる實狀を語り聞かすに忍びないので、

『そうね、僕等も陸軍の模様は詳しくは知らないが、まア君等の行く迄は大丈夫保つて居るだらう！。シツカリ働いてステツセルの首でもチョン切つて來給へ！』  
と冗談にまぎらすと、前の上等兵君が、

『そうですかなア、まだ二龍山は取れませんか？ 四十面下げて勳章を欲しがらる年でもないが、之でもまだ若い者には負けませんよ。併し矢つ張年には勝てないもので、背囊の重いのは閉口します！』

他の一人の頑丈な上等兵君が、

『死んだ後で勳章なんか貰つたつて仕様がな、夫よりも今の中に、熱カンで一杯戴きたいものですなア、アハ、ハ、ハ。私の村からは九人出た中で、六人まで戦死して二人は行方不明でさア、——どうせ今度は生きて還れる望はないから、出る前に娘に

養子をして置きました！』

成る程、二十三年兵と云へば、恰度三十五歳になる勘定ぢや。結婚の早い地方では年頃の娘のあるのも不思議ではない。戦争が後一年も續けば孫が出来来るかも知れぬ。

——嗚呼、孫の有る兵隊——支那や露西亞の兵隊ばかりを笑ふことは出来ない。

抑も兵役なるものは、徴兵制度の國に産れたる國民の重大義務である。世間は一般に兵役に服するを以て、男兒の名譽とし、本分とし、之を慶し、之を祝する。誠に軍國の美風と云ふべきである。兵役に服し得る如き強健なる體格を有する者は、實に其の人の幸福である。又名譽でもある。然るに幸か不幸か、兵役義務を免れたるものも、亦往々、之を慶し、之を祝する。『まア籤免がれで御安心』とは、吾人の屢々耳にする處である。斯の如く、兵役に當りたるものも、兵役を免れたるものも、共に等しく之を慶祝するのは、誠に奇妙な事象と言はねばならぬ。併し乍ら仔細に觀察すると、同じ慶祝の裡にも頗る異つた意味が含まれて居る。即ち兵役に取られたる者の祝賀は、主として町村其他の社團が、入營壯丁に對して行ふのであるが、之に反して、兵役を

免れたる者の祝賀は、免役當人若くは其の兩親が、親戚知友等に對して行ふのが多い。即ち前者は他動的にして後者は自動的である。他動と自動との此の相違こそ、兵役に對する國民の心理を、最も明白に表はせるものである。

右の如く兵役は納税と共に國民の二大義務であるが、退いて又考へると、人間一生の修養時代、研究時代たる青春の二三年間をば、全く世間と隔離せられたる兵營内に閉ち籠られ、自己將來の目的と全然没交渉なる、軍役に費やさねばならぬと云ふことは未來を有する青年に取りては、無上の苦痛であり、又至大の損害である。之が爲めには、折角得たる職業を抛棄せねばならぬものもある。折角著手したる研究を中止せねばならぬものもある。中には一家唯一人の稼ぎ手を兵役に徴され、家族が生計に窮する様なことも、屢々耳にする。又身體壯健なる者は、徴兵検査の濟ざるが爲めに備ひ手の無きものもある。斯くて身體強壯なるが爲に兵役に取られ、却つて不健康者よりも終生の後れを取るものも尠くない。而して一旦兵役を終りて、再び世間に出づるに當つては、前に占めたる地位職業は、既に他人の爲に奪はれて、就職難、生活難に

泣くも、社會は之を冷眼視して顧みない。甚しきは人を雇備するにも、兵隊上りでは何分ゴツ／＼して：：』と、頭を傾ぐる會社などもあると云ふことぢや。是に於てか、兵役を忌むの弊風、漸く青年の間に生じ、或は眼鏡を用ゐて故意に近眼となり、或は過失に託して指を切り落し、自ら求めて不具者となるものさへある。而も此の徴兵忌避の惡風は、〇〇並に〇〇社會に於て最も烈しいと云ふ噂である。黄金の魔力で検査官を麻酔さしたと云ふ様なことも、屢々新聞紙上に現はれて居る。有名なる某政治家は、其の青年時代の回想録中に、二百圓か三百圓かで兵役義務を贖つたと、さも得意然として吹聴して居る。素より某氏の如きは、一兵卒として兵役に従事するよりも、寧ろ他の方面に於て活動した方が、或はより多く國家の爲めになつたかも知れぬ。又當時の法律に依つて許されたる處に従ひ、兵役義務を贖つたと云ふことも、必ずしも不正義の事ではあるまい。唯之によつて觀るも兵役なるものが、昔から如何に國民に歡迎せられないかといふことを知ることが出来る。時代に目覺めたる青年は何時までも「名譽の義務」ばかりでは満足せぬであらう。

扱て第三軍の患うる處は、常に精銳なる下士卒の缺乏のみでなく、尙ほ又優良なる將校の多數を失ひ、之が補充の困難なることであつた。東鷄冠山方面の突撃に従事したる某々聯隊の將校には、中學校に於ける自分と同窓の友が澤山居つた。然るに攻撃の度毎に次第に其の數を減じて、此の時、尙ほ陣中に止まれるものは、僅に十の一二に過ぎない。中には、負傷の爲め再度後送されて、三たび出陣したもののさへある。凡そ軍隊に於て精銳なる下士卒を必要とするは勿論であるが、優良なる將校を得ると云ふことは、更に一層緊要である。戰場に於ける軍隊の士氣なるものは、素より個人精神に屬すること大であるが、多くの場合に於ては、寧ろ群衆心理に屬するもので、所謂狂者奔れば不狂者も奔ると云ふ附和雷同性を帯びたものである。故に九分まで勝つた戦闘が、一怯卒の爲に總崩れとなることもあれば、九分まで負けた戦闘が、一勇兵の爲に盛返へすこともある。殊に指揮者の精神は全隊の士氣を左右するもので、同一軍隊でも指揮者の怯勇に依つて、勇兵ともなり、又弱卒ともなることのあるは、古來の戦例に依つて明らかである。勇將の下弱卒なしとの古人の言は、多くの場合に於

て眞理たることを疑はない。而して指揮者たる將校にも、種々異りたる性格がある。智謀機略に富むものもあれば、勇猛豪膽なるものもある。旅順戦役の如き突撃的戦闘に於ては、才識非凡の智將よりも、寧ろ武勇絶倫なる闘將を必要とする。然るに近世科學の進歩は、人をして自ら物質的、才能的に趨らしめ、武勇の如きは動もすれば野蠻視せらるゝの風がある。素より現代の軍隊に必要な武勇とは、古の武士の如く三十六貫の鐵棒を振り廻したり、一寸の強弓を引いたりするのを云ふのではない。之を兵語的に言へば、所謂攻撃精神の旺盛なるものにして、平たく言へば、不撓不屈にして犠牲的精神の強いのを言ふのである。世人は宜く漢の天下は韓信、張良のみでは取れないと云ふが、吾人は反對に、二十世紀に於ける機械づくめの軍隊でも、蕭何や曹參許りでは戦に勝てないと云ひたい。抑も物に能不能あり、人に適不適がある。錐銳しと雖も釘を叩くこと能はず、鎚重しと雖も孔を鑽むことは出来ない。帷幄の將校に必要なものは、智謀と機略とである。彈下の將校に必要なものは、武勇と徳望とである。而して此等の兩性格は、動もすれば相一致し難い、乃ち智謀に富む者は

武勇に乏しく、機略に長せる者は徳望を缺くものが事實に於て多い。故に、若し之を完全に具備する人あらば、是れ大將軍の資格を有する人である。併し是の如きは千百人に十一を望み難い。且つ又武勇とか徳望とかは、平時に於ては其の美を發揮するの機會尠く、太平無事の世に在つては、此の派の士官は兎角逆境に終り勝ちなることは、孫子も之を説き、那翁も之を唱へて居る。適材適處、其の能に配するは、軍隊の健全なる發達を遂ぐる唯一の途であると同時に、黜陟進退其の宜しきに適するは、軍隊の旺盛なる士氣を維持する無二の計である。智將餘つて勇將に乏しきが如きことあらば是れ亡國の軍隊である。

知らず、日本の軍隊は如何？

### 二十四 血の價 (三)

過ぐる六月劍山の戦鬪以來、既に四萬に近き將卒を損じたる第三軍は、今や優秀精銳なる將校、下士卒の缺乏を告げ、其の數量に於ても、亦其實質に於ても、著しく兵力の減衰を來した。是に於て軍は切りに大本營に向ひて、新銳なる兵力の増勢を要求したるも、當時尙ほ内地に残留せる現役軍は、唯僅に大阪に待命中なる第七師團ばかりで、其他は何れも留守師團の補充部隊に過ぎない。即ち第七師團は此時大本營の握れる最後唯一の豫備隊であつた。故に今之を第三軍に増遣すれば、最早や内地に残る兵力は殆ど無くなるのである。陸軍戰術の立場としては、北進滿洲軍の戦局未だ確定せざる今日、容易く之を手放すに忍びないので、こゝ遽に第三軍の要望に應ずることが出来なかつた。

更に籲つて、此時に於ける我が聯合艦隊の狀況を顧みれば、開戦以來既に十箇



圖 艦の隊砲重戦陸軍

月に互る不休の行動と、數度の戦闘との爲め、艦艇の現狀は甚だしく不良となり、船體機關の衰耗汚損は素より論なく、重砲其他兵器の毀損せるものも尠くない。縦令婆爾的艦隊來らずとも、已に相當の修理覆繕を要する時機に達して居る。而して之が完全なる修繕を爲すとするれば、全國官私の工場を擧げ、大至急工事を以てするも、尙ほ少くも二ヶ月の日子を要する見込みである。是に於て東郷司令長官は、新作戰準備の爲め、已むを得ず、各艦交代修理の姑息手段を取りしも、旅順敵艦隊の現狀不明なる爲め、到底思ひ切つて多數の軍艦を引上げる譯には行かない。

抑も黄海々戰以來、旅順の敵艦隊は愈々益々退嬰の策を採り、恰も墓に驚きたる蝸牛の如く、奥へ／＼とひつ込んで、ちつとも其の姿を外海に現はさない。固より背面よりの我が間接射撃に依り、二三の軍艦は多少の損害を被れるは明らかなるも、沈没したるものは未だ唯の一隻もなく、何れも尙ほ相當の戦闘航海力を有して居る。蛇を殺すには、其の頭を碎くにあらざれば、幾回でも廻み返ると云ふが、軍艦も其のキールを海底の泥に埋むるまでは、縦令舷側や甲板に、三つや四つの彈丸が中つたとて

直ぐ修理が出来るので決して安心はならない。即ち當時の旅順艦隊はマハン大佐の言へる存状艦隊なるもので、いつ何時、我が虚を窺つて、飛び出して来るかも知れないのである。「レトウイザン」、「ボペーダ」、「ボルタワ」、「ベルスウエート」、「セワストポリ」の五戦艦と、「バーヤン」、「バルラダ」の二快速巡洋艦に對して、萬全の勝を制せんが爲には、我も亦少くも敵の一倍半以上の勢力を備へて居らねばならぬ。左れば我が一隻の戦艦と雖も、此際之を旅順方面より引き上ぐるは極めて危険であつた斯かる有様であるから、我が艦隊全部の修理を完了するのは、果して何時のことだか判らない。

加之、時は既に朔風期に移りて、浮流水雷の危険範圍は益々擴がり、我が艦艇の害を蒙むるもの次第に多くなつて來た。若し此際戦艦一隻たりとも、失ふが如きことあらんか、縦令旅順艦隊、唯今全滅するも、我は婆爾的艦隊に對して、到底最後の勝利を占むることは覺束ない、乃ち掛け替のなき我が艦隊をして、斯かる危険なる海面に永く滞留せしむるは、是れ千金の兒を虎穴に置くやうなものである。現に戦艦「朝日」

の如きは旅順口を距ること數十海里なる、山東角の沖合に於いて浮流水雷に傷ついた。幸に其の損害が輕かつたからこそ宜けれ、若し其の中り所が悪くて、「初瀬」の二の舞でもやらうものなら、勝敗の數は戦はずして已にきまつてしまふであらう。然らば何故に安全なる根據地に入つて居らぬかと言へば、根據地に碇泊して居つたのでは、敵艦隊不時の脱出に際し、我は之を邀撃するに間に合はないのである。

「朝日」水雷に罹るとの報に接したる時には、夫れこそ全艇震駭色を失うた、事情茲に至つては、何が何でも、一日も早く旅順の艦隊をば片付けて貰はねばならぬ。大義の爲には親を亡ぼす譬もある、國家の危急に際しては、氣の毒とか、同情とか、言つて居られなくなつた。そこで、旅順急攻の催促は復た又第三軍に向つて發せられた。此時に方り炎陽既に遠く南に去つて、朔風凜々、滿洲を掠めて到り、夏さへ緒き遼東の山野は、枯葉落葉、更に一段の蕭條を加へた。地は嚴霜に凍つて岩の如く、手足は冷氣に冒されて感覺を失し、第三軍の掘壕作業は日に漸く困難を加へた。秋徒に高くして人馬却つて瘦するを見ると云ふ有様で、軍司令官以下、何れも敵彈を避くる



爲め地隙 山腹に穴を掘つて、太古時代の穴居生活をやつて居る。戎衣半歳解くに暇なく、僅に一枚の寄贈毛布にくるまつて、夢かりそめに故山に飛ばば、憎くや砲聲が呼び覺ます、氷の如き潮水を浴びつゝ、小艇の封鎖勤務も随分辛い、陸軍の土窟棲居も嘸苦しいであらうと思はれた。

我が戦局の機運、漸く非ならんとするや、畏くも 大元帥陛下には痛く宸襟を惱ませ給ひ、陸海軍大臣、參謀總長、軍令部長などの主なる大本營幕僚を召して、作戰に關する御前會議を開かせられ、遂に第七師團をば第三軍の戦闘序列に編入さるゝと共に、乃木第三軍司令官に對し、

「今や陸海軍の狀況は旅順口攻略の機を緩ふするを得ざるものあり……。」との聖勅を降された。是に於て第七師團は直に戦地に向つて輸送を開始することとなり、最早や内地には一個の建制師團さへも残さざることとなつた。先帝の御製に

兒等は皆軍の庭に出で立ちて翁や獨り山田守るらん

實に帝國の軍備は此時、空明きとなつたのである。

凡そ國家有事の秋に際し、兵力の足らざる程、軍事當局者をして痛心苦慮せしむるものはない。然るに此の事たるや、素と軍事機密として、苟くも之を外間に發表することが出来ない、親の心子知らずの譬に洩れず、國民は勝手氣儘な太平樂を極め旅順の陥落が遅いと云つては、皮肉な惡口を言つたり、浦鹽艦隊が暴れたと言つては家の内へ石を投げ込む様な、不謹慎なことをやる。

優詔既に降る、第三軍たるもの豈、感激奮起せざるを得んや、軍司令官以下將卒共に恐奮恐起、誓つて成功を期しつゝ、十一月二十六日より、望臺方面に對して第三回總攻撃を開始した、從來の攻撃目標たる松樹山、二龍山、及び東鷄冠山北の三堡壘に對する外、別に各師團の選抜兵より成る特別支隊を編制し、側面より進んで、松樹山、補備砲臺を屠り、一氣呵成に旅順市街を衝かしめんと企てた。是ぞ、中村陸軍少將(覺)の率ゐたる有名なる白禪隊なるものである。

前日來の大砲撃の後、各師團は二十六日午後一時を期し、目的砲壘に對し、一齊に起つて突撃を執行した。此の戦闘、若し敵壘を抜く能はずんば、生きて復た陛下と國民とに對せずと、將士肉彈となつて敵壘に迫撃し、各師團長亦幄を第一線に進めて親しく戦を督した、敵の防禦は相變らず頑強である。戦況は例に依つて慘烈である我が突撃隊は従うて進めば従うて全滅し、損害刻々に増加するも、局面は毫も發展しない。左れど全軍全滅を期したる我が軍は、苟くも一兵一卒の存する限り、目的を達せざれば一步も退かじと、突撃に重ぬるに突撃を以つてし、息をも繼がず攻め立てた轟々として天地にどよめく重砲の響！ 憂々として彈流を吐き出す機關銃の音！ 爆煙進り、砂塵渦巻き、吶喊の叫び！ 叱咤の聲！ 實に乾輪爲めに弛みて、坤軸爲めに傾くばかりである。

斯くて接戦格闘、午より暮に至り、屍は胸牆に積んで、血は塹壕に湛ゆるも、敵壘は依然として尙ほ敵手に残つて居る。吁々！ 肉は遂に岩に勝つを得ざるか。氣は遂に鐵を碎くこと能はざるか、軍は甚大の損害を蒙りて一先づ突撃を中止し、最後の

策として、更に白禪隊に突撃を命じた。

是より先き、各師團の突撃を開始すると同時に、中村少將の指揮する特別支隊は、水師營の南方に集合し、影を潜めて時の到るを待った。乃木將軍司令官は軍騎此處に臨みて、親しく告ぐるに一場の訓示を以てした。曰く、

今や陸には敵勢大に増加し、海には婆爾的艦隊漸く來り迫らんとす。邦家の安危一に懸つて我が軍の雙肩に在り、此時に方り、予は、將に死地に就かんとする諸士に對し、其の成功を囑望すること洵に切なるものあり。諸士が一死君國に殉すべきは正に今日に在り。希くは努力せよ。

言々悲壯。語々痛烈。三千の將士肅として聲を呑む處、將軍の眼底慘として涙がある。尋で中村指揮官は部署を定め、且つ、約束を令して曰く、

一人たりとも生還を期せず、決死以て目的の達成に力めよ。  
夜間の襲撃は銃劍を以てし、敵の猛射を受くるも應射すべからず。  
前後左右の友隊と聯絡を確保し、互に相失する勿れ。

敵に臨みて躊躇する者あらば、幹部之を斬殺せよ。

敵の將帥を認めば生擒に努めよ。

彈藥を浪費する勿れ。

死傷者を顧慮する勿れ。

夜間味方識別の爲め、右肩より左腕に白布の標を掛くべし。

其の他條目十餘項。何れも死と血の文字である。短き晩秋の日も、早や、西に没す

ると共に、各方面に於ける彼我の砲聲亦漸く緩み、暮色凄然として敵壘を包む午後六

時、支隊は結束行を起し、肅々枚を銜んで、松樹山補備砲臺に向つた。途暗くして月

未だ昇らず、風冷やかにして星光凍るが如く、劍閃、白襪、纜に闇を導く。生きて返

らぬ梓弓、死地に乗り入る三千の兵！、風蕭々として易水寒しの慨きがある。

岩塊磊々たる嶮坂に、迂る足元踏みしめつゝ、聲を忍んで進み行く我が決死隊！。

人間半生の夢の跡、今宵ぞ曝らせ屍の月。將士の胸中千萬無量。

午後九時、我が先頭部隊は今ぞ猛然として、敵の壘前に迫つた。斯くと知りたる敵

兵は、直に探照燈を點じ、光彈を放ち、砲銃を亂射し、爆彈を亂擲し、狂勇を振つて  
我を迎へた。心は石より固けれど、身は鐵ならぬ我が兵は、忽ち大損害を被りて、見  
る／＼築く屍の堤！ 血の流れ！ 中村指揮官早くも重傷を負うて、指揮を次席將  
校に譲つた。

左れど決死の我が兵は毫も屈せず、益々勇を鼓し、氣を勵まし、戦友の死屍をば、  
踏み越え、飛び越え、蜘蛛手に張れる鐵條網を破壊し、劍尖揃へて一氣に敵の第一胸  
牆を乗り取つた。左しもの敵兵、我が猛勢に抗し兼ね、稍や退いて第二胸牆に據り  
更に強硬なる抗戦を持續した。地雷は轟然として各處に爆發し、爆彈飛び來ること雨  
の如く、濃煙淡々、咫尺を辨じない。敵、味方、入り交り、入り亂れ、擲り合ひ。擲  
み合ひ。突き合ひ。斬り合ひ。煙の中に亂戦、混闘、時早や移るも、敵兵頑として寸  
歩も退かない。中には點火したる數個の爆彈を身に附し、我が集團中に躍進し來つて  
我れ人共に碎くるの勇者もある。

斯かる間に、敵は次第に援兵を得ると共に、比隣の砲臺亦我が側背を猛射し、煙々



砲撃追

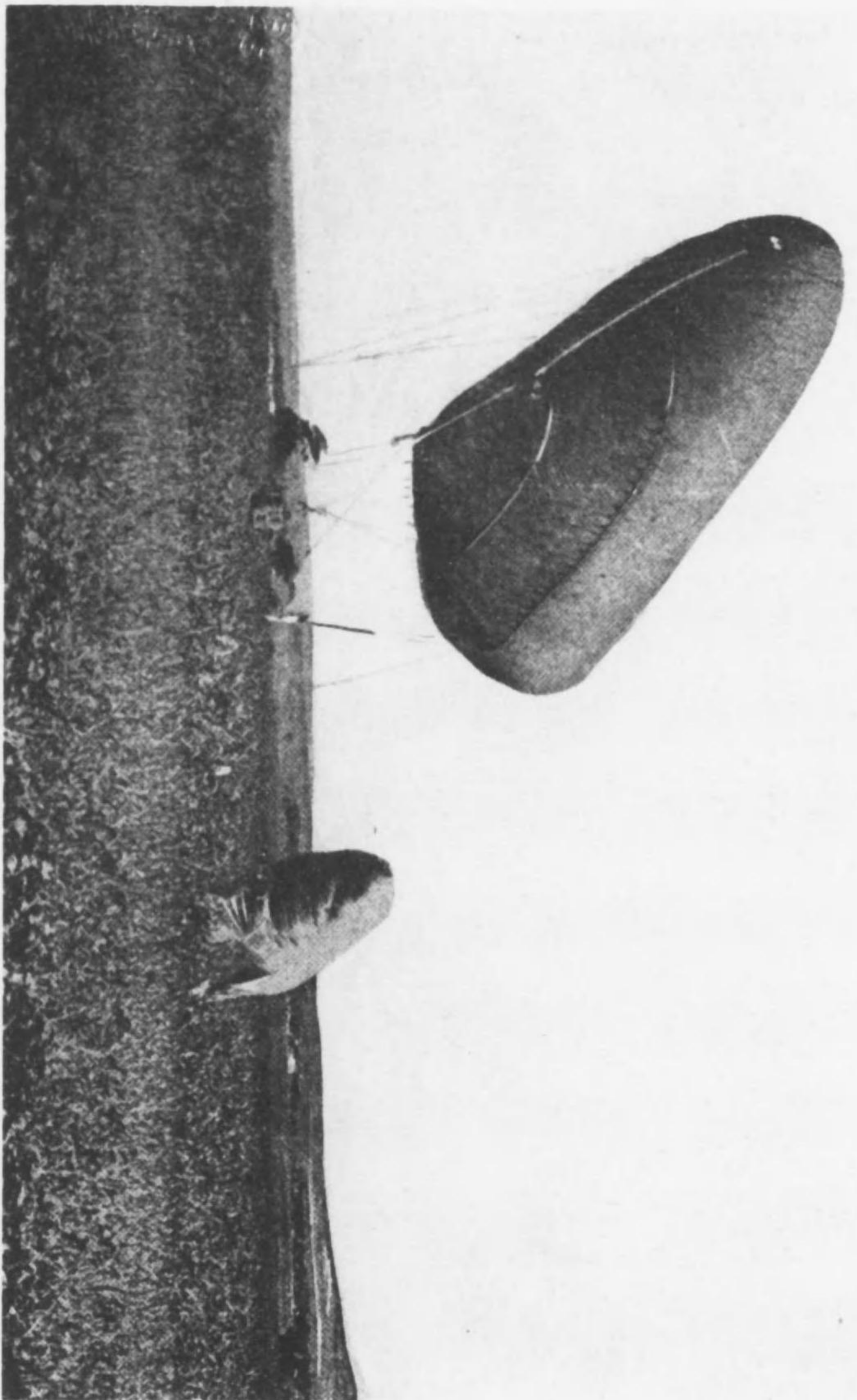


雷魚の上山

たる探照燈の下、我が白樺隊の影は刻々に減つて行く。翌朝松樹山麓を眺むれば、補備砲臺の邊り、白きは雪か？ 紅きは花か？ 是ぞ血潮に染まる白樺隊の伏屍！、嗚呼、壯烈なる白樺隊！、往きし三千の勇士中、生きて生えるはいと僅かであつた。必成を誓ひたる正面攻撃遂に效を奏せず、望を萬一に囑したる特別支隊亦全滅す。

軍は三たび血涙を呑んで、此の方面に對する攻撃を中止した。此時に當り戦期の永びくと共に、彼我の敵愾心と、憎惡の念とは、愈々益々増大して、戦鬪は次第に殘忍酷烈となり、今次攻撃の際の如きは嘘か真か、敵は我が負傷者は、勿論死者に至る迄も斬切截斷して、殘酷慘虐を逞しうしたと云ふことである。

古往今來、世界に於ける戦鬪の數は、幾千萬なるを知らずと雖も、凡そ旅順の戦鬪ぐらゐ、古今東西の戦術を一所に集めたるものはあるまい。後方陣地に在つては二十八珊瑚弾砲の如き二十世紀の銳砲を以て、數千米突の遠距離より、山丘を超えて間接射撃を行つて居る。壘前に在つては二千年以前に、支那人が發明したと云ふ煙火の筒の如き木製の迫撃砲や、「アイバンホー」の楯とも紛ふ携帶鐵楯や、前世紀の遺物たる



（球氣留繫） 祖元の者服征中空

爆弾などが、時を得顔に幅を利かして居る。進んで突撃戦に至りては、銃剣突貫の如きは、語るも及ばず、石の投げ合ひ、擲り合ひより、犬の喧嘩の如く咬み付き合ひまでやつて居る。更に地下戦に移れば、トンネル内に大砲を引き入れて、田鼠の戦鬨を演ずる如き、是れ抑戦術の進歩か退歩か、殊に陸戦に探照燈を用ひ、鐵條網に電流を通じたるは、此の役を以て嚆矢と爲すべく、若し夫れ、海上の魚形水雷を陸戦に應用したるは、窮策か將た名案か、蓋し奇中の奇と稱すべきである。其他、通信に軍用電話線の網を張り、偵察には不定全ながらも、輕氣球を用ひたるが如き、誠に古今戦術の博覽會の如き觀がある。

望臺方面に對する攻撃三たび失敗に歸するや、軍は直に攻撃目標を二〇三高地に轉じ、之が奪取を第一師團に命じた。過ぐる九月の戦に、一たび我が軍に脅かされて以來、敵は益々此地の防備を嚴にし、山巔より山腹にかけては、數段の散兵壕を鑿ち其の前面には更に數重の鐵條網を張り、掩蓋を設け、暗路を作り、壘上には多數の速射砲、機關銃を連置し、加ふるに大小案子山、椅子山、老鐵山、大陽溝、寺兒溝並に

海岸砲臺は、相牽援して其の側背を掩護し、今や防備の堅固なること、永久堡壘と多く相譲らざるに至つた。

二〇三高地に於ける犖猛凄慘なる激戦は、已に普く人口に膾炙せる處にして、事新しく陳ぶるまでもない。我が兵突撃して之を奪へば、敵逆襲して之を奪回し、取りつ取られつ、攻守互に其の地を更へたること幾回なるを知らない、敵軍之に據れば我が全砲火の焼點となり、我が軍之を占むれば、敵弾、雨の如く降り注ぐ、濛蔚たる山頂の煙は晝夜絶えず、海上より之を眺むれば、黒黄の濃煙漠々として北風にたなびき、恰も火山の煙を吐くが如き觀がある。乃木大將が『鐵血葎山山形更』と吟じたるもの誠に其の眞を穿つて居る。

一度ならず、二度三度、望臺方面の攻撃に敗れたる乃木司令官は此處を屍の棄て處と定め、新銳の兵力第七師團を増援して、損害死傷を顧みず、狂獅の勢を以て攻撃に努むれば、敵も亦旅順の運命此一山に懸れりとなし、海軍兵までも驅つて、傷虎の勇を振ひ、之が防戦に努めた。二〇三高地の戦は、今や兵器の戦闘を超絶して、大

和魂とスラブ魂との根較べである。

頃は十一月の中旬、寒風雪を散らして波も凍らんとする某日、大連の波止場には、陸兵を満載したる數隻の運送船が横付けして居る。是れぞ新たに來着したる第七師團の輸送船である。自分の同窓の一友人は、同師團某聯隊の中隊長をやつて居たので、船の入港するや否や、直に彼を其の甲板に訪ねた。船内に在る兵士を眺むれば是迄屢々見たる生白き補充兵や、髯ムシヤの後備兵と異なり、元氣満々、血色朱の如き現役兵である。殊に北海の風雪に鍛はれたる旭川師團の兵として、身を切る如き、寒風に外套さへも纏はざるもの多きを見ては、誠に頼もしく、之さへ往けばもう大丈夫と、何となく心強き感があった。

相見ざるに茲に十年、曾て紅顔の美少年たりし我が友は、今や顔色日に焼けて虎髯倒に怒る偉丈夫となつて居つた。

自「ヤア、しばらく！。今度は御苦勞さま！」

友「オヤ、之は奇遇だッ。先づ無事でお芽出度う！ 永らくの海上生活、嘸きつい

だらうね。オレなんか、タツタ三日の航海に、スツカリまゐつて仕舞つたがね。」  
 鳥「そんなに時化たかね。だが、君なんか船に強くなつた日にや、オレ達ア飯の食  
 ひ上がりだからなア。ハ、ハ、ハ。」

友「夫はそうと、一體、旅順はどうしたんだい？ 随分永いぢやないか。」

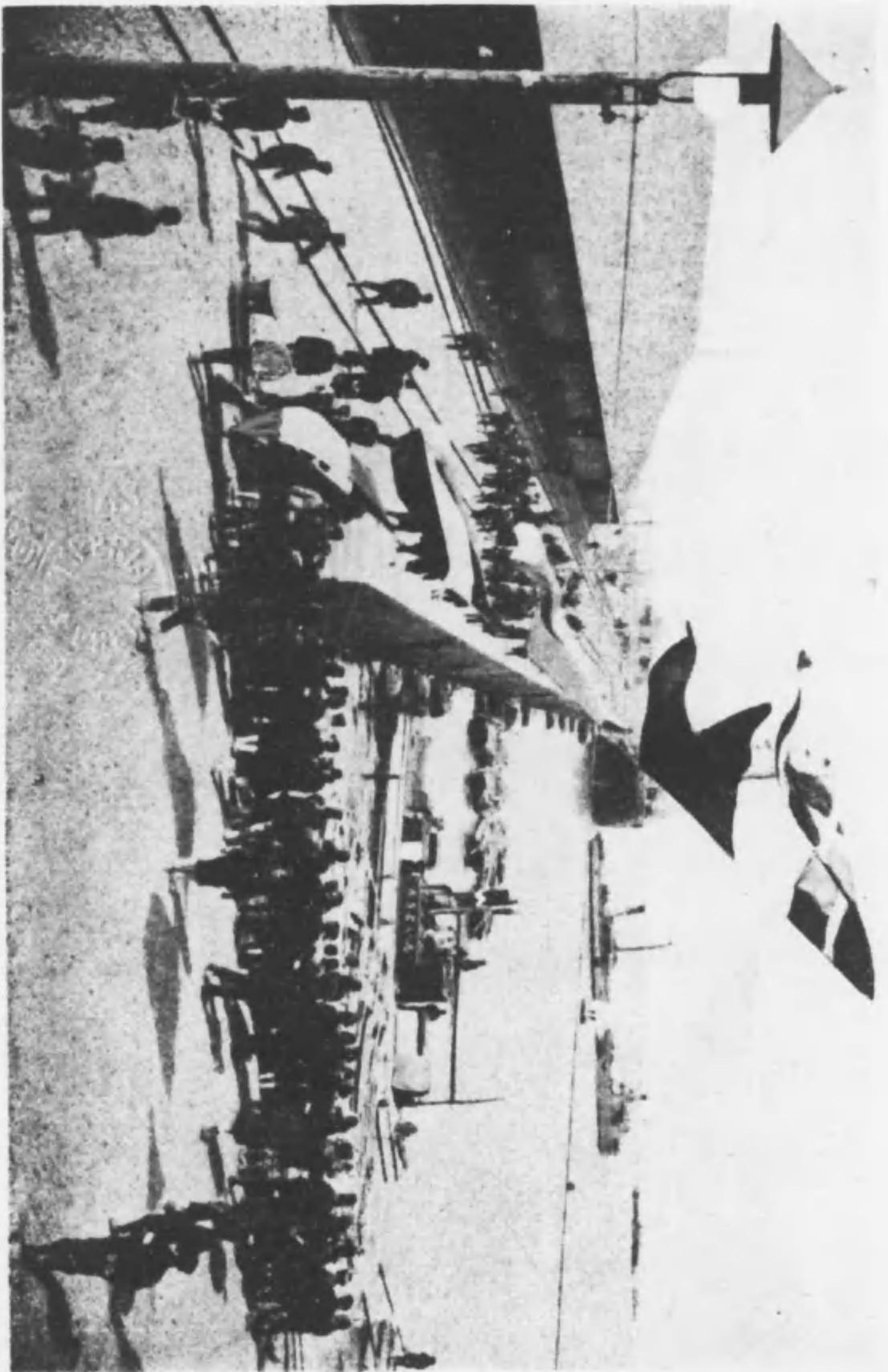
鳥「まア早く往つて、遣つ付けて呉れ給へ！」

友「でも、オレ達ア、是から何處へやられるんだか、判らないんだ。」

鳥「此處まで来て居ながら、何處へ行くのか知らないなんて、随分、呑氣過ぎるぢや  
 ないか。」

友「オレ達ばかりか、聯隊長だつて恐らく知りやすまいよ。」

戦場の門戸たる大連まで来て居ながら、旅順へ行くのやら、満洲の方へ行くのやら  
 將校にさへ判らぬとは、軍事機密の嚴格に保たれて居るのに感心した。第七師團が旅  
 順へ遣られるといふことは、自分達には既に十日も前から判つて居たのであるが、此  
 際、之を告げて良いものやら、悪いものやら判らないので、



大連 鶴 卓 頭



「第七師團でも行かなければ、旅順はもう落ちないよ。事によると君等も旅順行か  
も知れないせ。」

友の眉は微に動いた。

友「さうかね。どうもそうだらうと思つた。愈々旅順と極まつたのか！」  
と言つた儘、彼は眼をテーブルの上に落して、暫く沈思したが、再び決活なる態度  
に返へつて、

「自」愈々旅順と極まりや萬死に一生なした。君！、氣の毒だが、僕が戦死したと聞い  
たら、之を遺族に送つて呉れんか。」

と、「ポケット」を搜つて、友は或物を自分に渡し、尙ほも語を繼いで、

友「どうせ出征すりや、戦死は覚悟ちやが、旅順ちや恐らく髪の毛一本も残るまい。

せめて最後まで、身に付けて居たものを遺したいと思ふのも人情だからね、……」

「自」そりや、そうとも！ 併しオレだつて明日の命も知れない體だ、折角、預かつた  
處で、どうなるか判らないがね。」

友「無論そうさ！　だが、其の時は夫までのことさ。……君はまだ獨身だつたね、羨ましいよ。」

自「何が？」

友「それが判らん位だから、羨ましいと云ふんだ！　オレはもうこんな子供があるがね。……」

と内懐から、クリ／＼と肥つた三つばかりの、愛くるしい男の子の寫眞を出して見せた。

自「そう？　そりやお目出たう！　君でも矢張り子供は可愛いと見えるね。」

友「君でもとは残酷だね、之でもまだ當分は人間の中だぜ。……そりや君！、あの古

武士の様な乃木大將でさへ、南山で息子の墓を弔はれた時には、征馬不前人不語、

金州城外立三斜陽と吟まれた位だからね！」

自「成程、焼野の雉子夜の鶴とか、云ふ淨瑠璃の文句もあるね。ハ、ハ、ハ、」

自分には子の可愛いと云ふ感念がまだ起らなかつたので、半ばじょうだんを言ふと

友は最と本意なげに寫眞を收めた、折しも何處かで集合喇叭が鳴つたので、

自「夫ぢや之で御別れしやう！、折角達者でシツカリやつて呉れ給へ。何れ旅順でシ

ヤンベンでも酌まうね。」

とは言つたものゝ、自分は再び彼と會ふことが出来ようとは、更に思つて居なかつた。

友「そうか？、もう歸へるか、お名残惜しいが仕方がないね。……夫ぢや今のを頼む

ぞ！。御機嫌やう。」

指の痛む程、強い／＼握手を交換して船を出ると、波止場には彈藥、糧食など、種々の軍需品が亂雑に山積せられ、不潔、不規律なる數百名の支那苦力が、其の間に活動でなく、蠢動して居る。人夫頭然たる日本人が、棒切を以て彼等を豚の如く逐ひ廻はして居るのを見ると、人生れて亡國の民となるなかれの感がする。幾度か後振り返つて見たが、友は尙ほ獨り寒き甲板上に突つ立つて自分を見送つて居た。頬邊を千切る様な小雪交りの木枯風が、ビュー／＼と電信柱に唸つて居る、友は其の夜、隊と共に旅順に向つて出發した。

左しも頑強を極めたる敵兵も、不撓不屈の我が猛撃に抗し得ず、十二月五日に至り、遂に力盡きて二〇三高地を抛棄した。初め『占領』を報じて奪回せられ、次で『確實に占領』を報じて復た奪回せられたる二〇三高地は、是に至りて『愈々確實に占領』を報せられた。前月二十七日攻撃を開始してより此日に至るまで、將士共に眠らず、休まず、雪を嚙んで渴を醫し、糲を咬つて飢を凌ぎ、惡戰慘闘正に九晝夜。味方の死傷實に七千に達し、敵の損害亦三千を降らず、叢爾たる一山丘、飾るに一萬人の紅血を以てした。山腹以上、唯是れ死屍を以て掩はれ、尺寸の山皮をすら露はさない。斯くて二〇三高地は漸く取れたが、自分の友は果して死んだ。恐らくボツケツトに愛兒の寫眞を抱いたまゝ……乃木大將亦残れる一子を此山で殺した。僅に半月以前、運送船の甲板で自分に託せる品物こそ、今は恨めしくも、亡き友を偲ぶ悲しき遺物となつた、友が矢張り可愛いと言ひし彼の幼き兒は、今頃は母なる人の懷に抱かれて小さき心に父の歸りを待つて居るであらうに。生きた父——生きた夫の代りとして、此遺物を迎ふる時、歎きを知るには餘りに幼き我が兒の笑を見て、若き母なる人の胸



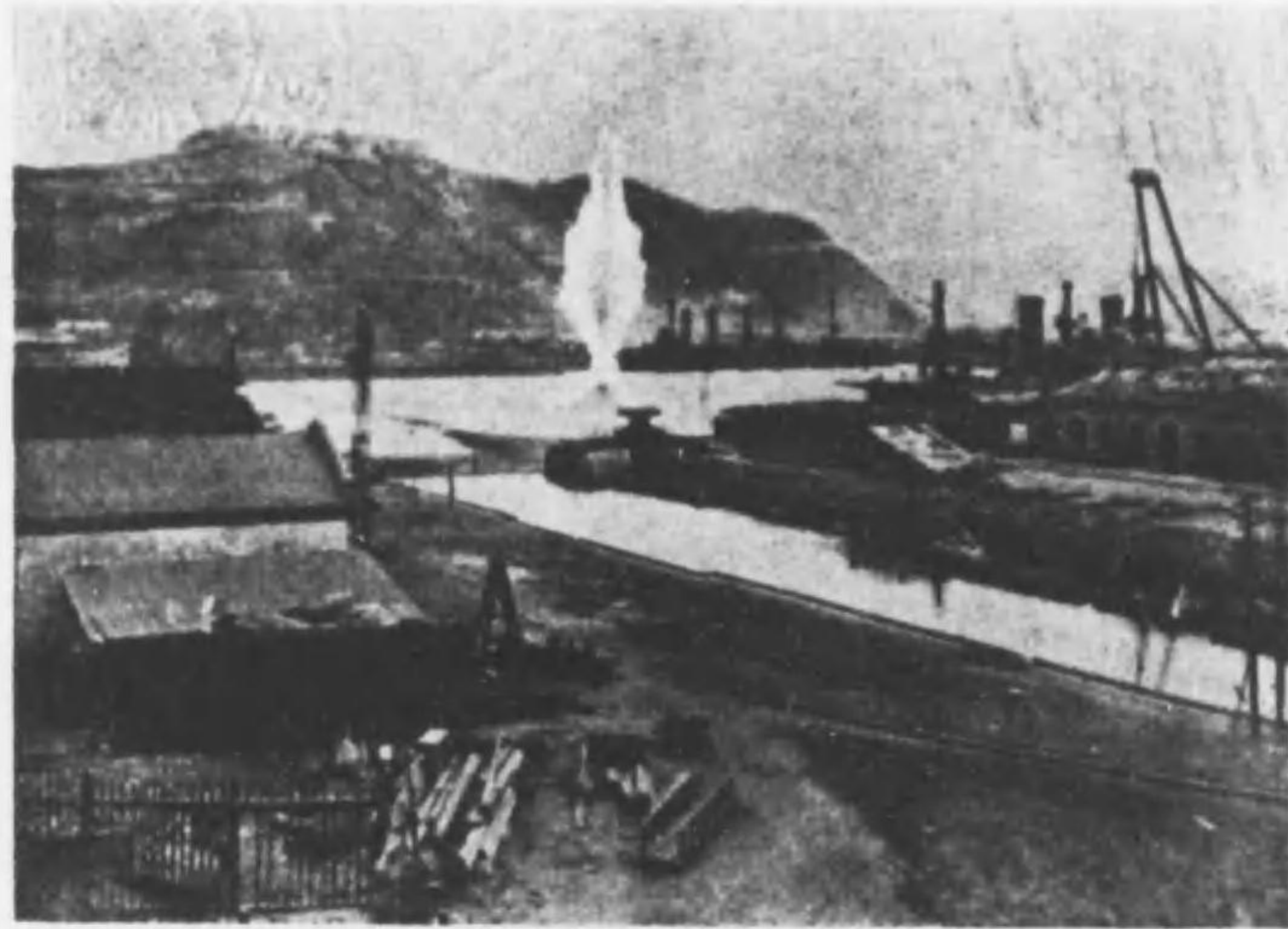
の中こそ、どんなであらう。

二〇三高地既に我が手に歸す。軍は時を移さず、此處に彈着觀測處を設け、港内敵艦に對する間接射撃を開始した。射撃の成果は驚くべく優良である。敵が呼んでカバンと名づけたる我が二十八榴彈砲の巨彈は、颯々たる震鳴を大空に響かしつゝ、白玉山頂を越えて頻りに敵艦上に落下し、高地占領後僅に三日にして、戦艦「セワストポリ」を除くの外、巡洋艦以上悉く海底に沈下した。是に至つて我が海軍の戦局は遽に展開し、艦隊の大部は旅順の封鎖を撤して内地に回航し、將に來らんとする新敵に對する作戰準備に着手することゝなつた。

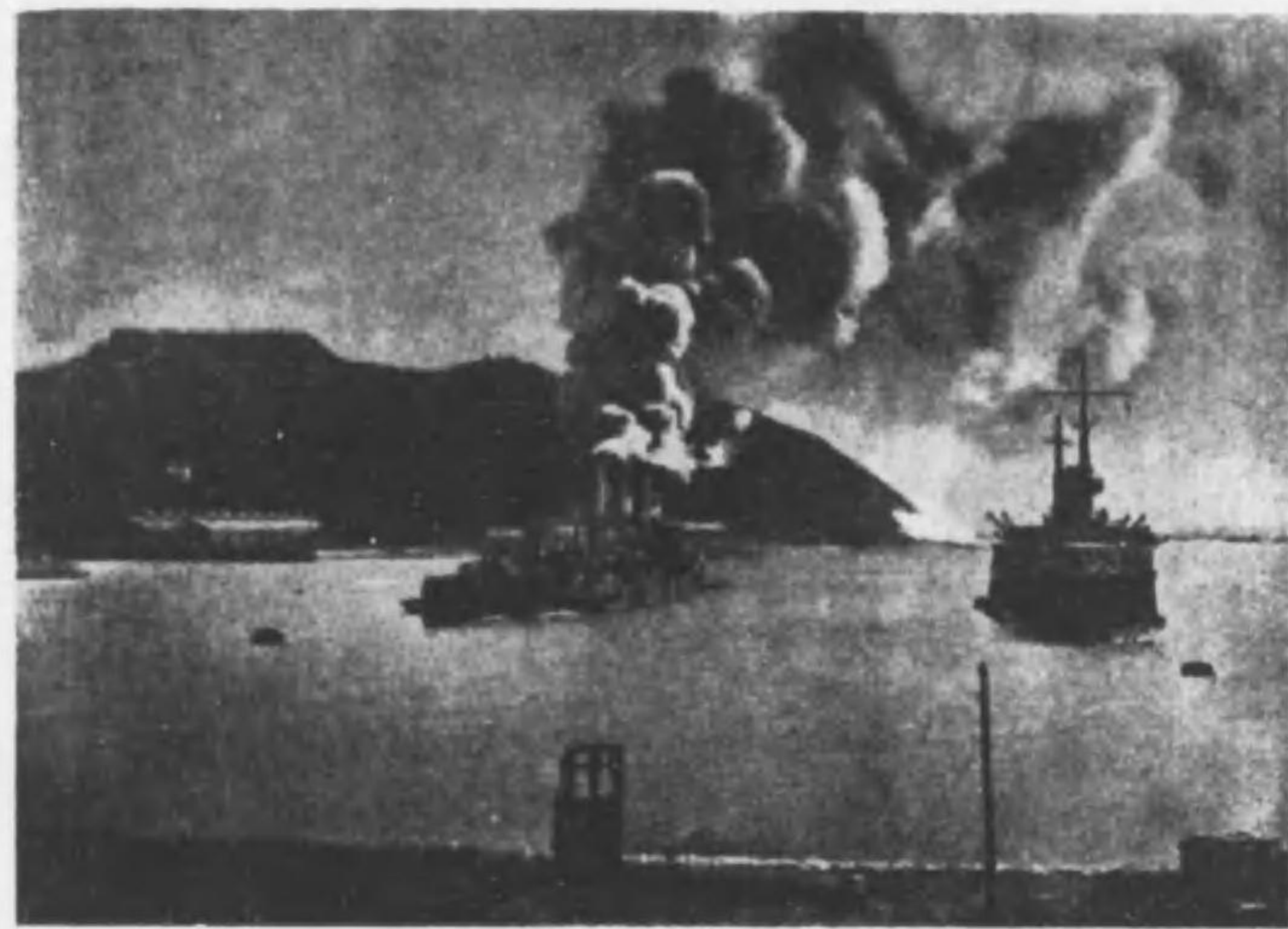
斯くの如く、二〇三高地の占領は、實に旅順方面の一戦局のみならず、實に復日露戦役に於ける、海陸大戦の局面に一大轉進を促したるものにして、帝國の危機は之に依つて救はれたのである。

二〇三高地の占領と、敵艦隊の全滅に勇氣百倍したる第三軍は、益々望臺方面に於ける攻撃作業を進捗し、十二月十八日には東鷄冠山北堡壘。同二十八日には二龍山堡

間 接 射 擊



水 柱 井 圖



猛 火 災

戰 影

三四四

壘。同三十一日には松樹山堡壘をば、夫々爆破占領し、更に三十八年一月一日には、遂に望臺山頂、我が日章旗を翻し、疾攻急襲、將に旅順の市街に突撃せんとした。是に於てか敵將ステツセル中將、到底其の支え難きを知り、翌二日、城を開いて降を乞ふに至り、茲に半歳の久しき、血を以て彩どられたる旅順の攻圍戦は、光輝ある終りを告ぐるに至つたのである。

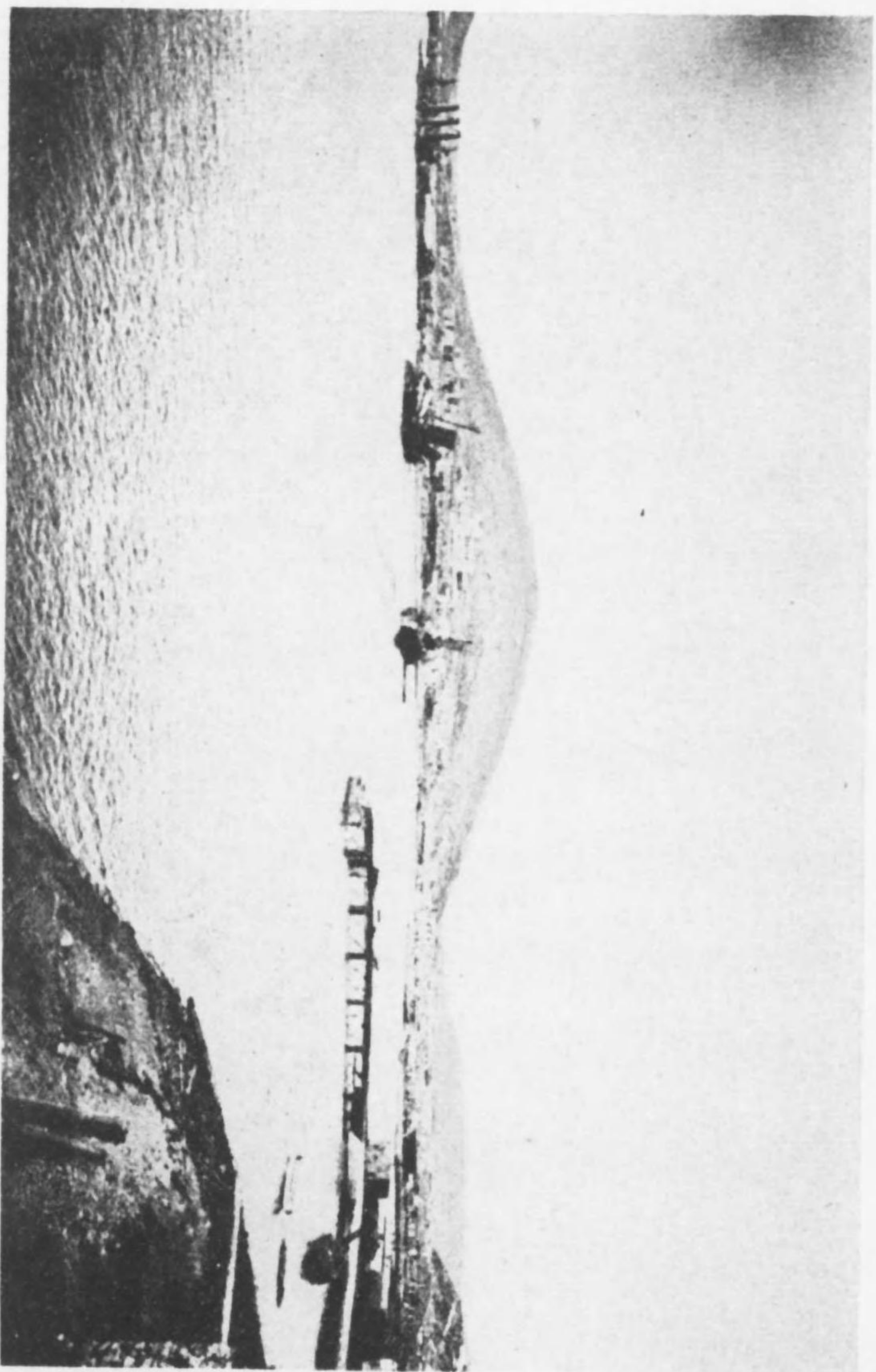
第三軍は、旅順攻圍軍として明治三十七年六月殆めて戦線に就き、尋で同年八月要塞に對する攻圍を開始してより以來、金湯の堅壘に據れる頑剛の敵兵と戦ふこと五閱月。其間、寒暑を忍び、缺乏に耐へ、苦楚辛酸殆ど嘗め盡さざるはなく、將卒の死傷復實に五萬五千の多きに達した。風雨茲に幾春秋、人は漸く當年慘戦の狀を忘れんとするも、望臺の麓、爾靈山の頂、骨白く、鬼火青く、岩間に開く可憐の墓は、今尙ほ血を含んで紅を帯ぶると云ふ。乃木大將凱旋の詩に曰く。

王師百萬征強虜

攻城野戰屍作山

愧我何顏看父老

凱歌今日幾人還



骸 残 の 艦 露

嗚呼、護國の爲に、血を流し、屍を曝らしたる兵者共の夢の跡！。今はあはれ夏草  
さへも茂らぬ白玉山の頂に、寂しく立てる忠魂碑のみぞ、獨り知るばかりである。  
遼東の一角に濺がれたる同胞六萬人の血の價！  
貴かりしか？  
將た

廉すかりしか？

は一に讀者の判斷に待つばかりである。

二十五 掉尾の一撃

旅順北西の要關二〇三高地、一たび我が軍の手に歸するや、港内在泊の敵艦は見る見る我が砲火の爲に撃沈せられ、戦艦「レトウキサン」、「ポペータ」、「ポルタワ」、「ペレスウエート」及び巡洋艦「バルラダ」は、枕をならべて白玉山の南麓に、其の残骸を横たへ、巡洋艦「バーヤン」は東海岸壁下に膠底し、あはれ浮城の艦體も、空しく貝鱗の巢と化し、徹甲の巨砲も徒に潮汐の洗ふに任すに至つた。此のときに方り獨り戦艦「セワストーポリ」のみは、深く東港の奥に潜伏して、我が觀測界を脱したるが爲め、いまだ鐵火の洗禮に浴せず、唵々として僅に餘喘を保つて居つた。然れば今日こそは、我が背面諸砲を擧つて、彼れに對する大搜撃を行ひ、其の息の根を止めて呉れんと、各砲彈丸を銜んで夜の明くるを待ちつゝありし十二月九日、彼れ「セワストーポリ」は僚艦の敢なき最期を眼前に眺めて、流石に弓矢取る身の恥かしと思ひ

けん、港口を罩むる曉の靄に乗じて、健氣にも港内を逃れ出て、砲艦「オトワズヌイ」竝に數隻の驅逐艦と共に、老虎尾半島なる城頭山の麓に據つた。これぞ我が軍に取りては、流星光底長蛇を逸するの恨みを遺したものである。

「セワストーポリ」既に港外に逸出す。最早や我陸上砲火を以て之を撃つことは出来ない。彼れ素より敗餘の老艦、敢て恐るゝに足らざるが如しと雖も、腐つても鯛は鯛なり、四門の十二吋砲と十門の六吋砲とを備ふる戦艦である。之を片付けざる限り、我が艦隊は未だ枕を高くして、黄海の備を空しうすることは出来ない。然るに敵要塞砲火と、機械水雷の危険とは、我が艦隊をして敵に近接せしむるを許さざると、驅逐艦は其の形體大にして、狭海面の襲撃に適せざるとの爲め、敵艦撃沈の命は爰に自ら水雷艇に向つて降る事となつた。二〇三高地占領、敵艦隊全滅の聲に悦ばされて、内地廻航の命令、今日や來る、明日や降ると、半歳のノラ鬚剃つて、私かに凱旋の快を夢みつゝありし艇隊の將士、

「オヤ、大變だ、佐世保行が冥途參りに變つちやつた！」



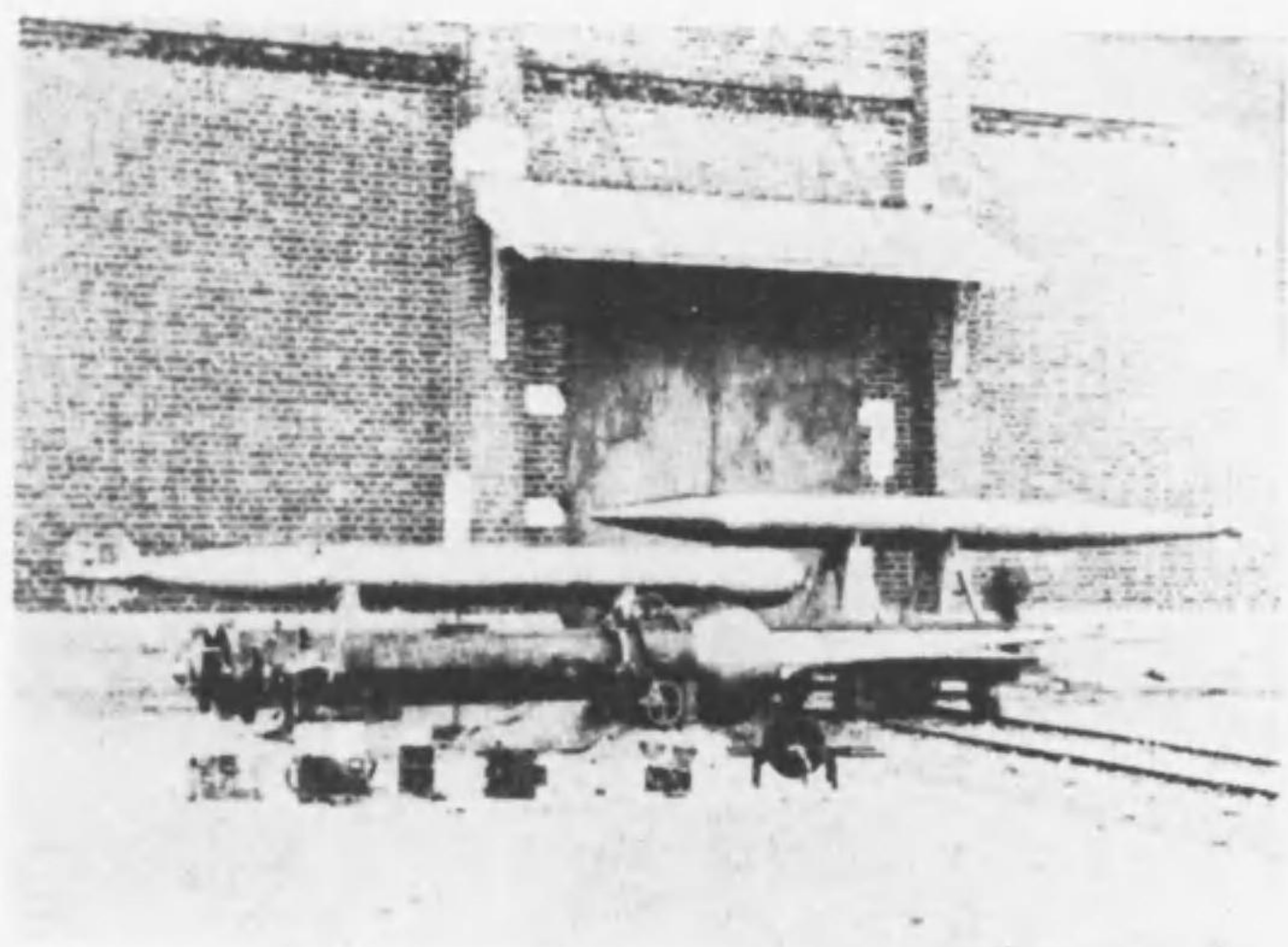
襲撃は機を逸せず、早速九日の晩から開始せられた。敵は要塞掩護の下に潜んで、防材を設け、防禦網を張り、哨艇を配し、探照燈を點じ、防備警戒共に嚴重を極めて居る。之が襲撃は蓋し難中の難である。加之時は十二月の中旬とは言へ、旅順の海は内地の極寒よりも尙ほ寒い。或晩の如きは寒風凜々、骨を刺し、息を凍らし、艇内に打ち込む飛沫は見る／＼甲板に凍つて、大砲も、發射管も、氷を以て包まれ、帽子の底、外套の裾には、氷柱を結んで白玉の乳房を垂らし、靴の底は甲板に凍着して離れぬ様なこともあつた。又或晩の如きは、飛雪繚亂として天海冥濛、咫尺を辨せず、平素十里の沖合を白晝と化する敵探照燈も、今宵は僅々千米突の近距離さへも照らし得ず、爲に索敵中、艇位を失して危ふく敵岸に乗り上げんとしたこともある。

斯かる天候の障害と、敵防備とを物ともせず、我が艇隊は二三隊宛交代して、連夜、勇猛大膽なる襲撃を決行した。従うて人員船體共に、毎夜多少の損害を蒙らざることなく、中にも永田大尉(武次郎)の指揮せる第五十三號艇の如きは、一夜極めて冒險、豪膽なる計畫を以て襲撃に向ひたる儘、艇も人も再び歸り來らず、無限の恨みを永へ

に旅順口外に留むるに至つた。而して我が魚雷は屢々命中爆發を確認するにも拘はらず、翌朝敵狀を観測すれば「セレストローポリ」は何等の變化なく、尙ほ依然として浮んで居る。前夜襲撃の狀況と、翌朝敵情観測の結果とが、艦隊長官に報告せられると、長官よりは、

「水雷艇の連夜勇敢なる襲撃を感謝す。更に今夜も〇個艇隊を選びて襲撃を續行せしむべし。」

と云ふおきまり文句の命令がある。斯くて襲撃既に四夜に及び、艇隊の犠牲は漸く大なるも、未だ何等の効果を奏しない。是に於て艇隊乗員の間には、水雷艇の武器たる十四吋魚形水雷の能力如何と云ふ様な問題が起つて來た。元來、水雷防禦網を張れる軍艦を轟沈するには、切網器を以て先づ防禦網を切斷したる後にあらざれば、艦底を破壊することは覺束ない。然るに此時、水雷艇の有せる十四吋魚形水雷には切網器を備へざるもの多く、又、縦令、之を備ふるものも、其の能力は頗る疑ふべきものがあつた。



魚形水雷及發射管



魚雷發射

斯かる魚雷を以て防禦網を張れる敵艦を轟沈せんとするは、是れ恰も拳固で暖簾を衝き破らんとするの類である。我等が爲には温情慈父の如き東郷長官、素より艇隊の苦衷を諒とせられたらんも、今や第三軍に對する義理として「セワストーポリ」丈は如何にしても、我が海軍の手に於て片付けねばならぬ場合である。水雷艇隊、縦令、全滅するも、攻撃を中止する譯には行かない。十四日朝に至り長官よりは、  
 「十四吋魚形水雷を以て防禦網を張れる敵艦を撃破し、以て帝國水雷艇の名譽を維持せよ。」

と云ふ嚴厲なる命令が降ると共に、同夜全水雷艇の總襲撃を命ぜられた。昔「スバルタ」の母は其の子を誡むるに、汝の劍の短きを患ふることなく、更に汝の一步を加へと云つたさうだが、是は又、汝の劍の鈍きを歎くことなく、敵の喉首へ食らひ付けと云ふ命令である。

凡そ軍隊に於ける軍令は絶対にして、部下として其の是非を論議することは許されない。唯死を以て之を決行するのみである。石に立つ矢の例もあれば、拳固で暖簾の

破れぬこともあるまい。成功？ 將た死？ 艇隊乗員の意氣は異様に激して來た。

十二月十四日は、元祿の其の昔、赤穂の四十七士が主君の仇を報じて、義士の譽を萬代に遺したる記念の日である。此の日朝來、天曇つて風寒く、波は舷側に凍つて霏雪橋頭に舞ひ、指も落ちなん天候であつた。こゝ堀部の屋敷ならぬ小平島錨地に集まれる水雷艇は、大小合して三十隻、各艇或は水雷の搭載に、或は炭水の補充に、母艦と運送船との間をば、旁午絡驛として往復頻繁を極め、劍氣颯々、港内に満ちて居る。龍王塘望樓より敵狀を観測すれば、目指す敵艦「セワストーポリ」は、城頭山砲臺の直下に當り、陸岸に近く艦首を沖合に向けて繫泊し、砲艦「オトワズヌイ」及び驅逐艦數隻を左右の哨艦に配備し、一隻の密輸入船は深く其の背後にかくれて居る。「セワストーポリ」の艦周をかこんで、新月形の一線を黒く海面に畫くものは、これぞ我等に取りては、石堤鐵壁よりも尙ほ破り難き、防禦網付防材である。更に陸上を見渡せば、臨時築城の小堡壘は遠くて見えねど、城頭山、饅頭山、蠻子營砲臺等の巨砲は、砲口を開いて傲然海面を睥睨し、海陸の防備、いとと嚴重である。木ツ葉に等しき織

弱なる水雷艇を驅つて、正々堂々、真正面より此の大敵を強襲せんとす、其の危きこと、正に是れ、一七深く鮫鱈の淵を探るの類である。

今宵一夜の生命と思へば、せめて最後の晩食に、飯らしき飯でも食うて死なんものと、此場に臨んで尙下司根性は失せず、戦備を整へ終つて母艦を訪へば、同じ思に士官室に集まれる艇隊の士官数名。何も顔容険々して眼に異様の光を帯び、語る詞にも自ら殺氣を含んで居る。

牛肉のジャ鍋をつつき合ひながら、一同晩飯を終り、互に幸運を祈り合つて、思ひ思ひに己の艇に引き取つた。夜はとつぷりと暮れて、寒さ愈々厳しく、雲間を洩る、星の光りも凍らんばかりである。在泊の艦艇は、悉く燈火を隠蔽して、螢火一つ舷外に洩らさない。暗黒静寂、真に死の如き、海の中に、獨り敵の探照燈のみは、毒々しき紫青の光焰を吐いて、靜かに旅順港外を警照して居る。陸上方面に當り斷續として遠く聞ゆる砲聲は、敵よりか將た味方よりか、恰も地獄からの迎え太鼓の如く、とら／＼と物凄き響を發して居る。

出發は正子と定められたので、最後の一睡を貪らんものと、暗き、寒き、士官室に降り、服をも脱がず、狭きベッドの上に横つた。過ぐる五月旅順方面に來りてより以來は、何時、敵弾に中つて死ぬやら、水雷に觸れて碎けるやら知れないので、死は常に覺悟して居つたが、此夜の様に沁み／＼と、死の決心を味はつたことはない。何となく今夜はやられる様な氣持がする。カチ／＼と命の綱を刻むが如き時計の音とピチャ／＼と舷側を舐める様な漣の聲とを聞き乍ら、靜かに眼を閉ざると、過去半生間に於ける悲喜憂樂の雜念が恰も走馬燈の如く腦裡に去來消現して、容易に眠られない。親しかりし友、慕はしかりし人、中學校でよく喧嘩をして叱られたこと、兵學校で空腹に泣いたこと、偕はどうせ死ぬるのなら、頭か胸を一思ひにやられたいものぢや。なまじ、手足を無くしたり、目が潰れたりして生きて居るのは、嘔、苦しいことであらうとか、此寒中に、身は死せずして船は沈み、海中に陥りて凍へ死ぬるのは、定めし辛いことであらう、冬身投げの少ないのも無理は無いななど、取り止めもなき下らぬことまでが念頭に浮んで來る。併し後に思ひを残すべき唯一人の係累をさへ有

せざる自分に在つては、此場合死なるものに對して、別に大なる煩悶も、悲哀も、亦恐怖も感ぜなかつた。とは言へ、決して生を望まない譯ではない。明日の日出を見ることが、出来るか出来ぬかと思ふと、何となく心淋しい、不安な念に堪へない。早く今夜が過ぎ去れば宜いと云ふ様な思ひもした。

眠るともなく、何時しかうと／＼とまどろんだ。發電機の回轉し始めた震動に驚かされて目を覺ますと、時は既に十一時半である。中尉は机にもたれて居眠りをして居る。當番を呼んで茶を一杯飲むうち、「豫定序列に従ひ出港せよ」との信號があつた。正かの時に身體の自由を失はぬ爲め、寒さを忍んで、いつも二枚重ねる外套を、今日のはわざと一枚丈著て上甲板に出た。風は静かだが寒氣は極めて酷烈ぢや。胴が屈んで齒の根がガタ／＼振ふ。各艇に點せる青赤の舷燈と、白の艇尾燈は、彼方此方に參差錯雜として、烏羽玉の如き暗の海を彩り、どれが僚艇やら、識別が出来ない。轆轤として錨を捲く響の裡に、

「○○○號艇！」

「オーイ。」

「何處か？」

「こゝだ！」

など、互に呼應する聲が寒に牙えて鋭く波に響いて居る。隣の中堀艇長が、

「オイ水野！ 貴様のところの機關室から燈りが少し洩れてるぞ。」

「そうか有難う！ 随分寒いね。」

「寒い／＼、胴が屈んで伸ひないが、……まア折角御機嫌よう！」

「命があつたら又明朝！ ハ、ハ、ハ、ハ。」

神ならぬ身の誰か知らん、是ぞ彼と最後の對話たらんとは。

二十餘隻の水雷艇は、順次列を制つて小平島錨地を發した。母艦からは深夜にも拘らず、總員登艦禮式を以て、我等の行を送つて呉た。此時、偶々、敵艦錨地附近に當つて猛烈なる砲撃が開始せられた。殷々たる砲聲は、夜の寂寞を破つて、雷の如く轟き互り、閃々たる砲火は昏黒の空を劈いて、電の如く輝いて居る。是ぞ偵察牽制の任

務を有せる、先發隊たる内田司令の率ゐる「第六」「第十二艇隊」の混成隊に對する敵の砲撃である。後の方で水兵達が、

「コン畜生！ 無茶に打ちやがるなア。あれぢや、あの隊は屹度全滅だらうよ。」

「オレ達もあんなにやられるんかね、殘酷だなア。」

など、囁く傍から、上等兵曹が誰か、

「幾ら打つたつて心配するな、命を取る彈はタツタ一つぢや。」

と、悟つた様なことを云つて居る。幾何もなく砲聲は止んで、天地は再び暗寂の夜に返り、獨り聞ゆるものは、船底を削るが如き機械の響と、輝くものは、敵探照燈ばかりである。

我が襲撃隊は、今や城頭山下なる敵艦錨地を目懸けて、唯一直線に進みつゝある。隊を導いて先頭に進むものは、先任司令笠間中佐の率ゐる「第十五艇隊」である。それに續く者は、神宮司少佐の率ゐる「第二」「第二十一艇隊」の混成隊、大瀧少佐の率ゐる「第十」「第十六艇隊」の混成隊、關少佐の率ゐる「第十四艇隊」、河瀬中佐の率ゐる「第九艇隊」にして、艇數擧つて二十二隻、單縦列を執つて陣形肅々暗を縫うて進む様、壯か、烈か。

前方を見渡せば、數基の敵探照燈は、強烈なる紫白の太光棒を眞黒の海面に放ち、其の或ものは一處を定照して、電光の哨線を劃し、「此より内へ入るものは撃沈すべし」と云はぬばかりに、頑張つて居る。また或ものは間斷なく上下左右に旋轉移動して、獲物もがたと頻りに海面を物色して居る。ことに「セレストーポリ」の左右に在る哨艦よりは、十字照線を張つて巧に敵艦の位置を隠蔽し、城頭山探照燈は故と其の光を収めて、襲撃隊の好目標たることを避けたるなど、其の警戒配備、面憎きまでに巧妙を極めて居る。

我が襲撃隊は漸次進んで、先頭部隊は既に敵探照燈の捕ふる處となつた。待ち構へたる敵砲臺は、之に對して一齊に砲撃を開始した。忽ち見る、熱鐵の驟雨は海を打つて、水柱沸々電光に輝き、眞紅の砲火は血を吐いて、紅焰閃々、暗空に進つて居る。砲聲の轟きに至りては、山も砕け、海も覆へらんばかり、壯乎、悲乎、美乎、將た凄

乎、形容に詞がない。

されど先頭艇は毫しも屈せず、彈雨を潜つて尙ほ前進を繼續して居る。砲撃は刻一刻激烈の度を増した。自分の艇は未だ探照を被らざるに、流彈跳彈は頻りに暗中より飛來して、不意に耳邊を掠むる氣味悪さ。此時城頭山探照燈は初めて點燈して、眞正面から我が隊列を縦照した。其の勢猛強烈なる光は、煌々燿々、又爛々として、眼を眩まし、眸を焦し、幾んど、前方を見ることが出来ない。小手を翳して光を掩ひ、纔に前方を透かし見れば、先頭の一艇は既に發射距離に達したるものゝ如く、針路を轉じて、今や敵に對し、舷側を正向して居る。敵の探照砲火は同艇に集中して、水煙林の如く簇立ち、硝煙雲の如く渦巻く中に、銀色に輝く小艇が黒龍の如き煤煙をば、水面低く響かしながら、白波を噛んで駛馳する光景。恰も織草の驟雨に惱めるが如く小魚の激湍に打たるゝが如く、悲壯、悽愴、到底筆舌の盡す所でない。

自分も今に、あの劍の山、否や彈丸の海に飛び込んで行くのかと思ふと、餘り愉快な心持は爲ない。抑も戰場に於ける人間の勇氣は、敵に對する抵抗力の、強弱有無

に依つて大なる相違がある。是れ即ち白刃相撃つて斃るゝは易く、首を延ばして死を待つは難いからである。例へば軍艦などに於ても、己れ沈黙して空しく敵の砲火を忍ぶ時と、自ら發砲して敵と奮戦する時とは、乗員の士氣に多大の弛張がある。然るに水雷艇に在つては、敵艦に肉薄して發射位置に達するまでは、手を空しうして敵の砲撃を受くるばかりで、所謂打たれ放なしの、擲られ損である。此間に於ける心持は、斬罪の囚人と、水雷艇乗り以外の者には恐らく味ふことが出来ない。

やがて次の艇が敵前に現はれた。敵の砲火は之に移された。先の艇は無事脱出したのか、將た不幸撃沈されたのが、何時しか其の姿が見えなくなつた。斯かる間に、自分の艇は次第に進んで、遂に敵探照界内に達した。彈丸はビューン／＼と益々烈しく飛んで來る。水煙はザブリ／＼と瀑の如く艇上に降り濺ぐ。探照燈は、前より、横より、其の猛光を浴びせ掛けて、眼の据ゑる處がない。最う斯うなると、度胸が据ゑるのか、棄鉢となるのか、彈丸も左程恐ろしくなければ、死と云ふことも殆ど念頭に浮ばない。

斯くて一艇退けば、一艇更に進み、今度は自分の隊が、愈々探照、彈雨の中心に向つて突入する順番となつた。彈丸の雨とは單に形容ばかりの詞ではない。右も、左も、前も、後も、銀の如き水柱で取り圍れて居る。

「前進全速！」「襲撃用意！」

艇の速力は増された。發射管は敵方に向つて廻された。此時最も心配なのは汽罐の状態である。自分の艇は是迄とても、罐管破損の爲め、行動中俄に運轉の自由を失したことが屢々あつた。若し此夜も亦敵前に於て斯かる事あらんか、敵の爲には黴り殺しとなり、味方に取りでは犬死となるのである。此時自分の最も恐れたところのものは、敵彈よりも寧ろ自艇の罐であつた。

自分の直ぐ前の艇は、既に敵方に向つて針路を曲げた。今は自分の艇が列の最先頭となつた、元來探照燈で取り圍んだ敵艦の距離などは、到底精確に測れるものではなく、一に艇長の目測に依るのである。もう發射しようか、最う轉舵しようか、若し早く退却して、後續艇に笑はれる如きことあつては、武士の名折れ、男兒の恥辱ぢや、

今少し、今暫くと、飛彈を潜り、猛照を冒して、進む間の心持こそ、實に、是れ一刻千秋、一里が千里の思ひがする。

中りそうで中らぬものは夜の砲彈である。艇は何等の損害をも被らず愈進んで今や城頭山探照燈をば、頭上高く仰ぎ見るの位置に達した。海岸の岩を洗ふ白波の光りらしいものも、臚に見えて居る。前續諸艇の猛襲を受けたるにも拘らず、「セワストーポリ」は尚ほ平然として浮んで居る。而も其の距離既に五六百米突と測定した。手頃は宜しと艇首の一水雷を發射して、

「取舵！」

艇首は徐に左舷に廻つて、船腹を正しく敵方に向けた。「セワストーポリ」、「オートワズヌイ」などより照らす數個の探照燈は、右舷側面より、黄金山探照燈は艇尾より、嶗嶺探照燈は、左舷後方より三面等しく我を射照して、甲板明るきこと實に白晝にも優り、外套の錆釘さへも電光を受けて、ギラ／＼と銀光を放つて居る。艇は今しも危険界の中心に乗り入つた。砲撃の烈しきこと正に其の絶頂に達した。併し敵彈の大



部は高く頭上を飛越して、截空の響のみ頻りに耳邊に呻鳴つて居る。

シュツ／＼と焼火箸を水中に突き込む如き音のするのは、機關銃の小弾であらう。

ビューン／＼と疾風の電線を切るが如き聲のするのは二、三吋の速射砲彈であらう。

折々風の「ウナリ」のやうにブーンと大氣を震鳴さすものは、十吋、十二吋の如き巨

彈の飛ぶのであらう。

自分は此時、司令塔上に突つ立つて、専ら前方を警戒しつゝ、艇の操縦を掌つて

居るので、後方を顧みる暇がない。艇員は生きて居るのやら、死んだのやら、ウンと

も、スンとも、咳一ツ聞えない。唯傳令の一水兵が、木像の如く身動きもせず、自分

の側に立つて居るのみである。顔は電光を浴びて、死人よりも尙ほ蒼白い色をしてを

る。「オイ！」と呼ぶと、唯僅に「ハイ！」と答へる許りぢや。折しも艇附將校から

『後部發射終る』との報告があつたので、中尉はまだ生きて居るなと思つた。

三個の魚雷を發射し終れば、命中か否かは判らねど、襲撃の我が任務は既に果され

た。長居は無用、是からは逃げ方である。再び左舷に轉舵して沖合に向つた。此敵前

回頭の一時時こそ實に危険の最頂點で、襲撃艇のやられるのは多く此時である。抑も

水雷艇、驅逐艦が驟雨の如き飛彈を潜つて、敵艦に肉迫しながら、比較的敵彈を被ら

ざるは、是れ我が形體の小なること、敵の測距離の不確實なること等にも因るが、我

が速力の快駿なることが大なる理由である。然るに轉舵中は艇速著しく減却する

が爲め、従つて敵彈の中る公算が多い。

早く廻はれ！ 早く廻はれ！！

自分の體が自然に捻れる、

艇は幸に、一發の敵彈も被らず、又、汽罐の故障も起らず、無事回頭を終へて、艇

尾を正しく敵方に向けた。敵は尙ほも後方より追照し、彈丸は烈しく飛んで來る。任

務終了に張り詰めし氣の弛みし爲めか、耳邊を掠むる彈丸の響が、無闇と氣味悪くな

つて來た。二十何海里の速力も尙ほ遅きに失する思ひがする。馬ならば鞭ちもせんに

と、自烈たくてたまらない、偶々右舷に近く、ブーンと底力のある大爆音を聞くと

同時に、ビシュツ！ 何だか艇體に中つた様な音がした。やられたと思ふ間もなく、

後の方で誰だか、

「艇長中りました！」

と意味不明の叫聲を發した。

「何處か？、水は入りやしないか調べて見ろ！。皆まだ生きて居るか？」

「大丈夫です、水線から二呎ばかり上です！ 前部員は皆無事です！」

尋で艇尾の方へも何か中つた様な音がしたと思ふと、「アツ」と叫んだものがある。

最う、大概で止して呉れ、ばよいがと思へど、敵はどこまでもと、追照追撃する恨めしさ！。

漸くにして探照界を脱し、速力を緩めて人員船體を檢査した。幸に乗員には一人の負傷者もない。中には着て居る外套を貫かれながら、身には微傷さへも負はぬ僥倖者もあつた。やがて一水兵は下甲板から、まだ生暖かい、可なり大きな弾片を拾つて來た。彈徑を計つて見ると、艦に十二吋砲の彈丸ぢや。險吞々々。若し之が彈片でなくて全彈であつたならば、三十名の乗員は悉く旅順の藻屑となるのであつた。

艇員互に無事を祝しながら、小平島錨地に歸り、翌朝戰況を尋ねると、僚艇第四十二號艇は敵彈の爲めに撃沈せられて、艇長中堀大尉(彦吉)以下艇員數名戰死し、其他人員船體に損害を被りたる艇も尠くなかつた。併し、戰鬪の猛激なりしに比すれば、損害は寧ろ輕微であつた。

嗚呼、中堀艇長！。昨夜出發の間際までも、互に言葉を変へたる彼は、此夜遂に敵彈に斃れて、潮冷たき旅順港外の水屑と消えた。彼は中學時代より自分とは一年の先輩であつた。同郷同窓同隊の誼みを以て、自分は兄弟の如く親しく彼と交つて居た。彼の快活圓滿なる性格は、上官には愛せられ、同僚には親しまれ、部下には敬せられ、殺伐なる艇隊の激談會には彼は常に中和劑であつた。

此夜、彼は我艇隊の三番艇たる第四十二號艇に艇長として、二番艇たる自分の艇に續行した。既に襲撃を果して轉舵退却中、敵の一彈は同艇の汽罐室に命中した。高壓の蒸氣は忽ち逸奔して艇は敵彈亂下の下に停止するに至り、罐室に在りたる者は悉く熱湯と熱汽との爲めに生きながら茹で殺された。

襲撃の昂奮より、此時、初めて我に返へりたる艇長傳令兵は、不圖傍の艇長を眺めた。併しそこには艇長の姿は見えず、司令塔上ヌルリとぬめりし生温き一塊りの血糊！ 傳令は我を忘れて、

「艇長が……。」

と叫んだ。敵弾に粉碎されしか、海中に轉落したるか、艇長の體は煙の如く何時の間にか、何處にか消え去つた。彼は最後の一言を發することもなく、又、一人として彼の最後を見たものもなく、唯一抹の血潮ばかりが彼の最後を物語つて居る、何と美しき死よ、何とあつけなき死よ。

後より思へば昨夜母艦に於て夕食を共にしたる時、彼は日頃の快活にも似ず、何時もなく元氣がない様であつた。

「オイ、どうしたい？ ちつともやらんぢやないか。腹でも痛むのか？」

「そうでもないが、何だか今日は氣持が變なんだ、飯がちつとも美味くない。」

「これから襲撃に出掛けるのに、そいつは困つたね。腹が減つては軍は出来ないぜ。」

「セバ」さへ片付いたら、早速、S W (佐世保回航の信號) ぢや。もう、後二三日だから辛棒しろ。」

「さア二三日命が持つか知らん。だがS Wなんて随分巫山戯た信號ぢやないか。」

「司令部も案外隅には置けんさ。貴様はWが待つて居るけれども、オレのSは何處かへ行つちやつたので、今度歸つたら又新株募集ぢや。」

「貴様はいつも氣樂ぢやなア、オレは今晚は何だか變な氣持がしていかんのぢや。」

「變な氣でどんな氣だい？ 戦死でもしさうなといふのかい？ ハハハ……。下らぬことを考へるなよ。まア一杯やれ！ オレなんかモ一度佐世保の土を踏まなけりや、死んでも死なないことに極めたのぢや。でも襲撃はどうか今晚だけで願ひ下げにしたいなア。毎晩誰か彼かやられて来るんだから、あまり良い氣持はしないね。勇敢なる襲撃を感謝」されるのも、もう澤山ぢや。」

「今晚は己の番かも知れんよ」

「ぢや 遺言でも聞いて置かうか、ハハハ……。」

こんな談話が交はされたのも、或は蟲の知らせであつたのかも知れない。彼には新婚後僅に半月足らずで、出征の爲め愛の生木を割かれた若い美しい妻があつた。彼のベッドの前には何時も、可愛らしい彼女の寫眞が飾られて居た。口の悪い同僚の岡焼半分の冷かしに對して、彼は満足さうに、『可哀想に君等は女房の味も知らずに死ぬるのかなア』とニコ／＼しながら問はるゝまゝに見合の時や、結婚の時の事などを戲談交ちりに面白く話すが常であつた。

彼は敵艦隊の滅亡と共に、近く佐世保に返へれるといふことを一日千秋の思で楽しんで居た。一年に近き間、獨り淋しく出征の夫の身を思ひ累ひたる、彼の新妻も亦恐らく同じ思ひを以て、彼の歸りを待ち侘びて居たであらう、然も天無情か、人無常か、彼は佐世保回航を旬日の中に見ながら、旅順港外の花と散りしか、鬼と化せしか體は消えて艇は沈み、髪の毛一本も形見として後に残るものはなかつた。自分は如何なる言葉を以て此悲報を、十九の未亡人に報すべきかを知らなかつた。『國家の爲めに

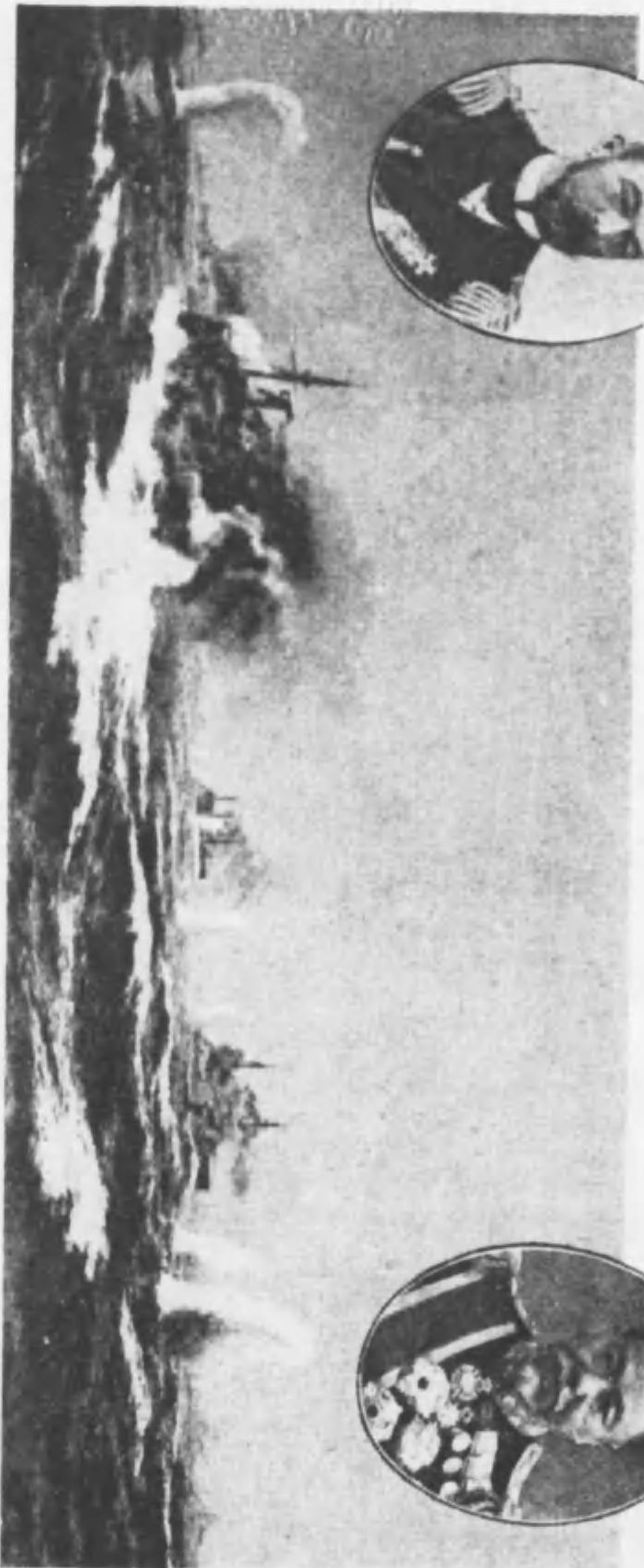
名譽の戦死』とは知らぬ人には言へもしやうが、彼と彼女の場合に於て、どうしてそんな白々しい冷酷な言葉が使へやう！代れるものなら代つてやりたい心地さへした。

第四十二號艇が白煙に包まれつゝ敵前に進退自由を失せるを見たる後續の第四十號艇は、襲撃を終はるや直に之が救援に向つた。敵は我が哀れなる破艇に向つて尙ほも探照砲火を猛集して居る。勇敢なる第四十號艇長中原大尉は敵彈亂下の中に悠然艇を横付けして曳索を取つた。やがて前進を始むるや、浸水の爲め艇體沈下せる四十二號艇の抗抵に耐えず、曳索は忽ちブツリと切れた。再び艇を横付けて再び曳索を取れば再び切れ、三たび取れば三たび切れた。此間敵彈は尙ほ頻りに落下して居る。斯かる間に四十二號艇は浸水益烈しく今や到底沈没の免れ難きに至つた。中原艇長は四たび横付て生残の乗員を收容し、將に沈まんとする友艇を委棄して漸く彈着外に出た。艇の横付作業は平常冷靜の時に於てすら可なりの難事である。況して敵彈の下に於て之を行ふことは、非常の勇氣と膽力とが無ければ容易に出来る仕事ではない。しかも僚艇救助の爲めとは云へ、一度ならず、二度ならず、四たび迄も行ひたる中原大尉

の沈勇と豪膽とは、聞く者舌を捲かぬはなかつた。

襲撃は翌夜も亦續行せられ、第二十一艇隊司令江副少佐(武靖)は壯烈なる戦死を遂げた。陽氣發する處金石も亦透るとか、流石に防備堅固の敵艦も、連夜不撓の我が攻撃に撃破せられ、十六日に至り茲に始めて襲撃中止の命令に接した。百餘の魚雷と幾多の將士とを犠牲として、僅に一戦艦を撃滅し得たる直接の効果は、縦し大ならずとするも、六日に互る不撓不屈の我が水雷攻撃は、將に來らんとする敵第二艦隊將士の心膽を寒からしめ、竟に其の司令長官をして、水雷襲撃を避くる爲め、夜間朝鮮海峡の通過を斷念せしめ、延ひて我に有利なる日本海海戦を導きたる間接の効果は極めて大なるものがあつたと思ふ。

嗚呼、戦争！ 嗚呼、戦争！ 戦争に依つて、我が大日本帝國は、所謂一等國の班に列し、東亞の小國民は、忽ち世界の國民と爲りすました。然れど、戦争の蔭に注がれたる血幾石？ 涙幾斗？ 知る人、果して幾人かある。言ふ勿れ、一將功成つて萬骨枯ると、萬骨を枯らして榮華に誇るものは、豈、夫れ、獨り一介武弁の將軍との



司令官 東郷 平八郎 大日本帝國海軍少将



海軍大臣 東郷 平八郎 大日本帝國海軍少将

み謂はんや。見よ！

彼處に不具の廢兵がある！。彼處に無告の孤獨がある！

此一戦の歌

(一) 對陣の巻

守るも攻むるも黒金の  
 浮べる城ぞ頼みなる  
 浮べる其城日の本の  
 興廢決せる此一戦  
 年は明治の三十八  
 頃しも皐月の末つ方  
 二十七日の朝まだき  
 狭霧立ちこむ對馬洋  
 露國艦隊司令長官

「ロゼストウエンスキー」中將は

精銳の艦船三十八隻を引率し  
 我帝國の艦隊と  
 雌雄を一舉に決せんと  
 鳥も通はぬ玄海の  
 狂ひに狂ふ荒波を  
 陣形堂々勇ましく  
 唯一文字に蹴破りつ  
 備へ厳しき帝國の  
 西の關門朝鮮海峡に  
 乗り入りたるぞ健氣なり  
 扱ても露國の艦隊は  
 孤軍重圍に陥るれる

旅順の味方救へとの

ツアールの勅長みて

去年十月秋なかは

紅もゆる紅葉葉に

赤き心を誓ひつゝ

氷塞せるバルチックの

リバウの港を舟出して

行くては遠き東洋の

路は一萬七千裡

八重の汐路の波枕

重ねくゝて何時しかに

冬去り春も闌け行きて

杜鵑血に啼く昨日今日

『都をば霞と共に出でしかど

秋風ぞ吹く白河の關』

古歌の心も偲ばれて

過ぎ行し方をつくゝと

思ひ廻はせば夢なれや

怒濤船を呑む大西洋

炎熱骨を溶かす印度洋

晝はひねもす諸訓練

夜は夜もすがら哨戒や

心休むる閑もなく

嘗め盡したる憂き苦勞

況して半歳にあまる航海に

船底穢れ汽機弛み

此一戦の歌



船も乗手も諸共に

疲れ果てしぞ是非もなや

海行かば水漬く屍山行かば

草むす屍ものゝ夫が

國に捧げし一命は

今日を限りの日本海

勝目なきさの藻屑ぞと

覺悟きはめて雄々しくも

疲れし身にも勇を鼓し

今や戦の風吹き荒さび

熱鐵の時雨降る

修羅の巷に進み入る

露艦將士の胸の中

思ひやるこそ哀れなり

茲に又帝國聯合艦隊は

旅順の敵を亡ぼして

新に戦備を整頓し

朝鮮國の南なる

鎮海湾の奥深く

姿ひそめて専らに

武を練り兵を鍛ひつゝ

腕を擦つて新來の

敵を待つことゝ幾月

士氣は昂つて天を衝き

兵氣は凝つて海を掩ふ

逸以て勞を待つ

此一戦の歌

戦影

勝利は既に我に在り

司令長官 東郷海軍大將は

此朝見張りの哨艦より

敵艦見ゆとの警電に

寢覺め勝なる曉の

夢破られてホ、ぞ笑み

待ちに待ちたる敵來る

いでや唯一戦に撃滅せんものと

直に令を全軍に下し

隊を率ゐて出動す

陣は長蛇か龍鱗か

橋林と立ち並び

靡く煙は雲となる

向ふは何處ぞ眞丈夫が

心筑紫の沖の島

將校士卒諸共に

こそぞ命の捨て處

日頃受けたる國恩に

報ゆる時は今日なりと

口にはそれと言はねども

決死の色は人々の

面に満ちて溢れたり

此日風怒つて波逆巻き

濛氣深くして日を掩ふ

展望僅に五六海里に満たざれば

日は早や午を過ぐれども

此一戦の歌

敵の艦隊まだ見えす

もしも此敵逃しては

御國の運も末なりと

心焦ら立つその中に

やがて二時にも近き頃

嬉しや南西の沖はるか

朧にかすむ海面に

二列縦陣堂々と

後尾を濛氣に没しつゝ

白地に藍の斜十字

大戦開旗ひらくと

檣頭高く翻へし

怒濤を蹴つて進み來る

敵艦凡そ三十餘隻

雲を抜け出る蛟龍か

波を蹴上ぐる長鯨か

黒煙濛々白波躍る

豪壯雄偉の光景は

鯢鰐爲めに恐れ逃げ

海若驚き隠るゝばかりなり

旗艦三笠の艦橋に

すつくと立てる長官は

敵勢ゆたかに打ち眺め

莞爾と笑を洩らしつゝ

あな見事なる敵艦や

相手に取りて不足なし

此一戦の歌

大和武夫の海の子が

武勇を試すは今なりと

戦鬪の令を降すと諸共に

旗艦の橋頭サツと閃めく信號は

「皇國の興廢此一戦に在り

各員一層奮勵努力せよ」

朝日かゞやく戦鬪旗

各艦艇の橋頭に

目も煌やかに翻へれば

全軍の士氣更に張り

戦はずして敵を呑む

勇氣凛々又勃々

斯くて日露の兩艦隊

距離は次第に近づきて

早や一萬米突と測られぬ

放たばとどく彈丸なれど

敵も打たねば我も亦

満を搾つて相持する

殺氣磅礴空に満ち

戦氣は凝つて虹となる

百隻に餘まる艦艇が

怒れる海の唯中に

鳴りをしづめて肅々と

互に詰め寄る有様は

正に是れ兩虎嶋を負ふて相對し

雙龍雲を捲ひて相向ふに異らず

背裂けて息はづみ

肉は躍つて骨ぞ鳴る

震天覆海の決戦は

今瞬刻に逼りけり

今瞬間に逼りけり

(二) 決戦の巻

猛虎牙を研ぎ蒼龍爪を磨いて相向ふ

實にや風嘯き雲起るの慨あり

扱ても日露の兩艦隊

距離は愈々近づきて

早や七千米突となりければ

敵の旗艦「スワロフ」は

手頃は良しと眞つ先に

十二吋の大砲を

三笠目懸けて打ち放つ

砲口迸しる硝烟は

山端に渦巻く夏雲の

湧くかとはばかり凄まじく

やがて飛び来る百貫の

眞鐵の彈丸は鎗根の

響を空に呻らせつ

三笠の側にとつと落つ

打たれて波は荒び立ち

數十尺の水柱

艦より高く龍卷きて

此一戦の歌

沫の瀧は沛然と

上甲板を洗ひけり

此一發を合圖とし

逸りに逸る敵艦の

我れ後れじと一齊に

打ち出す彈丸は雨霰

林の如き波柱

艦の周りを塞ち込めて

三笠の運命今は早や

危機一髪と見えにけり

されど東郷長官は

彈丸の霰のその中に

寸鐵の防禦なき

上艦橋に衝つ立ちつ

滿を保つて尙ほ放たず

溢るゝ勇氣抑へつゝ

今や遅しと發砲の

令待つ將士の心には

正に一刻千秋の思あり

やがて距離六千米突に近づくや

時こそ好けれと長官は

こゝに始めて砲撃の

令を降すと諸共に

旗艦三笠を始めとし

各艦徐ろに打ち出す

精神こもる我が彈丸に

此一戦の歌

一つ虚弾のあらばこそ  
敵の旗艦「スワロフ」は

忽ち夥多の弾丸を受け

死傷損害数知れず

司令長官「ロ」中將

這は叶はじとや思ひけん

早くも針路を折り曲げて

弓張形に逃れ行く

我艦隊は之を追ひ

敵と針路を並べつゝ

次第に發射の速度を増し

急射撃にぞ移りける

扱ても此日の戦は

敵の主力も十二隻

我の主力も十二隻

之に伴ふ艦艇は

巡洋、驅逐、水雷艇

其數擧つて百餘隻

敵も味方も諸共に

何れ劣らぬ眞丈夫が

祖國の運命此の一戦に在りと

逆巻く怒濤を蹴立てつゝ

墨より濃き煤煙を

濁れる空に漲らし

打ちつ打たれつ追ひ追はれ

こゝを先途と戦へば

此一戦の歌

砲の響は百雷の

一時に落つる如くにて

碎くる弾丸の爆煙は

火山の裂くるにさも似たり

戦ひ今ぞたけなはに

白煙黒煙打ち混り

海面深く立ちこめて

艦影さえも見え分かす

龍争虎闘の大決戦

天柱碎け地軸折れ

是ぞ此世の終りかと

思ひやられて物凄し

激戦凡そ一時間

敵艦多くは火を發し

或は檣打ち折られ

或は舷碎かれて

陣形漸く亂れ立ち

苦戦の色ぞ見えにける

勝に乗りたる我軍は

益勇み戦へば

弾丸は霞か將た雨か

折しも我の一弾は

敵の旗艦に命中し

司令塔をば打ち碎く

あはれ提督「ロ」中將

重傷を負ふて打ち倒れ

此一戦の歌



艦は舵機をば壞されて  
 自と列を離れけり  
 旗艦を撃たれし敵軍は  
 早や亂陣に陥りて  
 戦ふ勇氣も荒海に  
 向ふ定めず逃げ迷ふ  
 我が艦隊も敵弾に  
 多少の損害蒙りて  
 血は甲板を飾れども  
 何の撓まん大和魂  
 一絲亂れぬ陣形に  
 丁字乙字の戦法や  
 正攻奇襲の懸引や

秘術を盡して追ひ撃てば  
 彼方に一隻此方に二隻  
 打たるゝ敵も數多く  
 波は血潮に朱に染み  
 溺るゝ敵の叫喚は  
 阿鼻の地獄に尙ほまさり  
 見渡す限り海面は  
 壊れし艦の船具もて  
 埋もるばかりぞ見えにける  
 左れば此日の戦に  
 敵が精銳と頼みてし  
 戦艦「スワロフ」「ポロヂノ」「オストラビヤ」  
 「アレキサンダー」を始めとし

特務艦「ルス」「ウラル」「カムチャツカ」の七隻は

あはれ我が砲弾に碎かれて

三千有餘の將卒諸共に

恨みは深き日本海

底の藻屑となり果てぬ

かくて激戦數時間

日は早や西に入相の

鐘ならなくに砲の音

次第々々に衰えて

空も小暗くなり行けば

我が艦隊は戦を

驅逐隊艇隊に譲りつゝ

明日の戦に備へんと

砲火を收めて北の方

姿を暗に隠しけり

さしも激しき戦も

しばし途絶えて波の音

ひとり騒げるそが中に

暗を辿りて荒波を

潜りつ進む數十の

味方驅逐艦水雷艇

荒鷲狙ふ隼か

長鯨襲ふ鯨の子か

壯烈無比の襲撃は

いざ是よりぞ始まらん

いざ是よりぞ始まらん

(三) 夜襲の巻

五月二十七日も既に暮れ  
 天地を撼かす大戦も  
 いつしかやみに敵味方  
 影も腕になり行けば  
 爰に日露の艦隊は  
 共に砲火を收めつゝ  
 西と東に別れしが  
 敵は此日の戦に  
 力と頼みし精銳の  
 堅艦夥多亡ひて  
 將卒共に士氣阻み

列も四途路に打ち亂れ  
 或は南に逃ぐるもあり  
 或は北に走るもあり  
 闇を便りに己がじゝ  
 活路を求めて逃れけり  
 さる程に爰に又  
 帝國驅逐隊艇隊は  
 終日艦隊に随伴し  
 強風怒濤と戦ひて  
 衣は潮に浸されつ  
 露は肌水滴れど  
 着換ゆる閑も荒波に  
 揺られて食さえ取りも得ず

此一戦の歌

しぶきの礫絶間なく

面を打てば息詰まり

眼血走り手足萎え

飢寒交々身に浸めど

國に報ゆる一念は

鐵石よりも尙ほ堅く

荒鷲狙ふ隼の

敵を斃すか我れ死すか

二つに一つの運命を

かよわき船に打ち委し

月なき空の宵暗に

燈火隠し音を忍び

心を四方に配りつゝ

朧に残る煤煙の

影を知るべに搜ぐり入る

艦艇凡そ六十隻

敵の軍艦一隻も

逃さじものと勇ましく

東南北の三面より

唯一時に攻め寄せたりし

晝の戦の弾丸の雨

やう／＼逃れし敵艦は

ほつと息つく閑もなく

またも水雷襲撃に

脅やかされて氣もそゞろ

あゝ戦に打ち敗れ

此一戦の歌

暗路を忍ぶ落武者の  
 そよぐ尾花に氣をくばり  
 葉末の露にも心おく  
 それにも似たる敵の艦  
 哀れといふも愚なり  
 折しも敵の一隊は  
 何驚くや白波の  
 色も見分かぬ烏羽玉の  
 闇を貫く探照燈  
 俄かにバツと輝やかし  
 天魔の焰を吐くが如と  
 海面隈なく射照らして  
 怪しき影と見るよりも

弾丸の霰を注ぎけり  
 我各隊は之が爲め  
 却て敵の所在を知り  
 六十餘隻の艦艇は  
 眼も眩む探照の  
 光を小手に翳しつゝ  
 燈火慕ふ夏蟲か  
 川瀬に競ふいささ魚か  
 入り交り馳せ違ひ  
 左右前後の嫌ひなく  
 縦横無盡に突撃せば  
 敵も最後の勇を鼓し  
 死物狂ひの防戦に

紫青の電光闇を貫き

真紅の砲焰波を灼く

夏の夕の稻妻か

冬の朝の漁火か

咲くや満池の紅蓮

一時に開くが如くにて

霹靂天地に鳴り渡り

彈丸は時雨と降り頻きる

暗にもしるき水柱

電光浴びて白銀の

林の如く立ち並び

隙間もあらず見えけるは

恰も是れ鯨鯢怒つて波逆巻き

蛟龍躍つて潮沸騰するの慨あり

此時風稍や静まりしも

狂へる波の尙ほ高く

艇はさながら空櫓の

波に揉まるゝ如くにて

人々柱に椅子絶り

纒に身をば支えしが

船底叩く荒波は

船も砕けと物凄し

防禦微弱き我艇は

心は矢竹に逸れども

彈丸と波とに惱まされ

或は機關を碎かれて

此一戦の歌

敵探照の其下に

進退自由を失すもあり

或は船底穿たれて

逆巻き返へる荒海に

恨みを呑んで沈むもあり

壯烈悲凄の有様は

晝の戦に尙ほまさり

敵の勢力なかくに

侮り難くぞ見えにけり

されど決死の我軍は

將校死すれば下士代はれ

下士斃れるば卒代はれ

一人の命ある限り

機械の動くその限り

目指す敵艦沈めずば

引きぞ返へすな梓弓

矢を射る如き全速に

山なす怒濤一文字

蹴るや飛沫の瀧の雨

罐火も消えんばかりなり

敵早や既に近づきぬ

發射用意の號令に

斃れし友の血糊もて

滑べる甲板踏み締めつ

放つ魚雷は過たず

天地も崩るゝ響して

此一戦の歌

敵船腹を打ち砕く

鬼神も避くる猛襲に

流石の敵も氣を吞まれ

進退遂に谷まりて

襲はゞ襲へと棄て鉢の

探照燈をば消滅し

放つ砲火も闇の中

傷つく僚艦打ち棄てし

後白波と右左

ちり／＼ばらと逃げ失せたり

我が艦艇は敗残の

敵を搜つて夜もすがら

疲れし體を勵ましたつ

闇の荒海駆け廻ぐり

隨所に敵をば襲ひ打ち

戦艦「ナワリン」「シンイベリキ」

巡洋艦「ナヒモフ」「モノマフ」を撃滅し

曉告ぐる東雲の

白むと共に勇ましく

凱歌を奏し引揚げしが

あはれ水雷艇第三十四號第三十五號

第六十九號の三艇は

武運拙なく敵弾に

打ち砕かれて無残にも

波風荒き對馬沖

數多の勇士諸共に

此一戦の歌



沈み果てしぞ恨みなる  
あゝ日本の此一戦

敵の弱きにあらねども  
天佑神助我に在り

地の利人の和併せ得て  
此日晝夜の合戦に

強敵見事撃ち破り  
大日本の礎を

萬代揺がぬ富士が根に  
固く据えたるいさほしは

千代に八千代に朽ちざらん  
千代に八千代に朽ちざらん

感状

第十艇隊

明治三十七年五月三日旅順口第  
三次閉塞時閉塞船隊員收容  
ノ為風濤ヲ冒シ敵ノ砲火ニ屈セス  
能ク此困難ニ任務ヲ遂行シタルハ  
其勇烈顕著ナリト認ム仍テ茲ニ感  
状ヲ授與スルモノナリ

明治三十七年一月十二日  
聯合艦隊司令長官東郷平八郎

感状

第十艇隊

明治三十八年五月廿四夜風濤ヲ  
冒シ敵艦隊ニ迫リ有効ナルキ  
襲撃ヲ遂ケタルニシテ敵艦隊ヲ  
シテ潰乱分裂セシメ間接ニ翌日  
追撃戦ヲ利セリ其功績少ナキ  
乃テ茲ニ感状ヲ授與スルモノナリ

明治三十八年五月廿四日  
聯合艦隊司令長官東郷平八郎

昭和五年三月十二日印刷  
昭和五年三月十五日發行

版權  
所有

發  
兌

東京市芝區愛宕下町  
四丁目四十四番地

戰  
影

定價貳圓八拾錢

著  
者  
水  
野  
廣  
德

發  
行  
者  
山  
本  
三  
生  
東京市芝區愛宕下町四丁目四〇番地

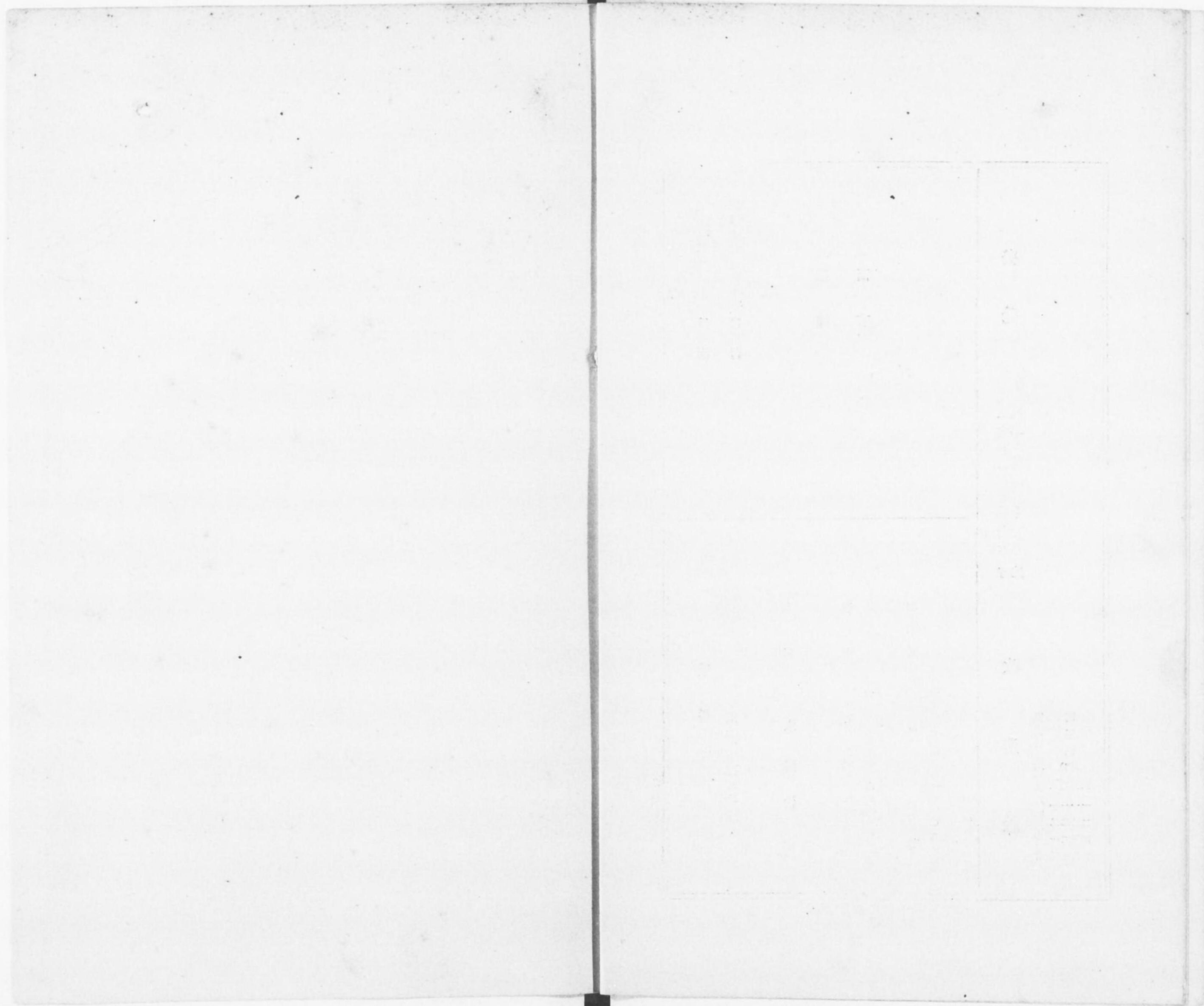
印  
刷  
者  
君  
島  
潔  
東京市小石川區久堅町一〇八番地

改  
造  
社

振替口座東京八四〇二番  
電話芝(43)  
-----  
-----  
四三二一  
番番番番

(新榮社製本)

刷印社會式株刷印同共



356  
24

終

